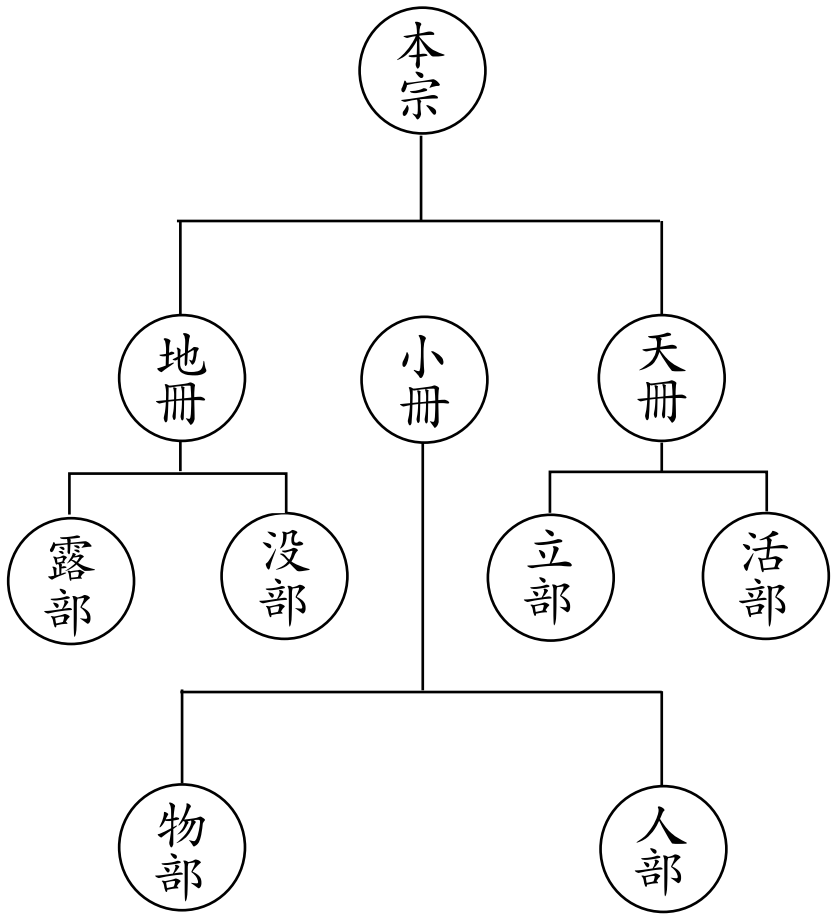
梅園三語　玄語　第一冊

本宗

丁未浄本準拠


本宗
地冊
小冊
天冊
露部
没部
立部
活部
物部
人部

玄語目（げんごもく）

本宗（ほんそう）

会昜（いんよう）

天地（てんち）

並びに圖（ならびにず）

並びに圖（ならびにず）

玄語

日本　鎮西　三浦晉　安貞　著

本宗

会易

一四* 物は性を有し、性は物を具す、
［一一］*朱書
一五* 性は體に偶し、物は氣に偶す、
一六 性は物に性す、
一七 物は性に物す、故に
一八 一卽一一、
一九* 一一卽一、
二〇 氣は天を成す、
二一 物は地を成す、
二二 性は一を具す、
二三 體は一を闕く、
二四* 具一體二、剖して經を爲す、
二五 一氣一物、對して緯を爲す、
二六 分るれは則ち二、粲立す、
性は物と混成して、而して罅縫無し、故に其の一や全なり、
物は性と粲立して、而して條理有り、故に其の二や偏なり、

合すれば則ち一　混成す、
一は徒らに一なれば則ち分合せず、
二は徒らに二なれば則ち剖對せず、　一二は徒らならず。
立てば則ち各なり、
成れば則ち全なり、　是を以て
剖を以て一を分つ、
對を以て二を合す、
剖けば　則ち經なり、
對すれば則ち緯なり、
之を經し之を緯す。條理は自から分る。錦を以て之を言うに。
爲物は經緯朱緑なり、
成物は鸞鳳華卉なり、
其の神は則ち巧婦の意匠なり。是を以て錦は必ず一經一緯なり。
神は用し物は成る。是に於て
一緯の經と分れざる無し、
一經の緯と合せざる無し、
合すれば則ち龍起鸞舞す。
龍起鸞舞すと雖も。而も

(Iwa 389a)

四六
四七
四八ー四九
五〇ー五一
五二ー五三
五四ー五五
五六
五七
五八
五九ー六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八

分るれば則ち經は自から經と比す、
　緯は自から緯と比す、
是を以て一匹の錦、性は表裏の二體を具す。
巧婦は神を運す。蠶絲は物を立す。
人巧知らず。天造の薀に至る。
蓋し大物の氣物爲るや。經緯は以て通塞す、
　精麁は以て没露す、
經通は時を爲し、而して神は事を此に用す、
緯塞は處を成し、而して物は物を此に體す、
是を以て一匹の錦。經緯は物す、
　紡績は事す、
龍をして斯に起たしめ鸞をして斯に舞わしむ、
表の燦爛を弄して、而して
裏の隱幽を窺う、
經緯は相い反す。
類類は相い比す。
以て對待の道を察す。
全錦一匹。

表裏兩面。
以て剖析の所を察す。是を以て
錦は則ち本一、故に全なり、
表裏は則ち二、故に偏なり、
全なれば則ち表裏混成し、縫縫を没す、
偏なれば則ち表裏粲立し、條理を見す、是に於て
一匹の錦は、條理整然たり。
鸞羽龍鱗、巧婦苟くもせざるなり。
爰に龍起鸞舞を經緯に繹ぬれば。
則ち髣髴に龍を起し鸞を舞わさん。
二の一に於るは、亦た
一の一に於るなり。
是か非か。元氣の玄。明を開き幽を閉ず。
混は則ち一にして而して粲は則ち二か。
粲に對すれば則ち混も亦た粲と竝立す、竝立すと雖も、而も
混は則ち粲中に没して、能く一を全にす、
混は有すれば則ち粲も亦た混成を爲す、混成すと雖も、而も
粲は則ち混中に露して、能く二を偏にす、故に

全は亦た偏と對して、而して二は能く一に合す、是に於て
二の一に於るは。亦た一の一に於るなり。故に
一にして二に伍する。勢は一一を成す。
痕を著くれば則ち隻を見すなり。故に
性は一を具すと雖も。體の一を闕くと竝立す。
竝立は則ち痕を著す。一と自から問有り。問有りと雖も。
性は能く一を具す、故に其の才は能く融し能く通ず、
體は能く一を闕く、故に其の用は能く分ち能く隔つ、
性は已に物に性す、何ぞ亦た體有る、具闕にして後、剖析盡きず、
物は已に性に物す、何ぞ亦た氣有る、精麁にして後、對待變を盡くす、
配すれば則ち性體の氣物に竝ぶを觀る、
合すれば則ち性體の氣物に入るを觀る、是に於て
二闕は反して、
一具に合す、分合共に一にして。而して
一は則ち易、
一は則ち会、一一の各名を得るなり。
闕は能く物に體す、而して其の二を立す、
具は能く物に性す、而して其の一を露す、

（I 389b）

八七
八八ー八九
九〇
九一
九二ー九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇
一〇一
一〇二
一〇三
一〇四ー〇五
一〇六
一〇七*

一〇八　剖して散ず、
一〇九*　對して合す、是に於て
一一〇　具性は会易に走る、
一一一　闕體は天地を立す、
一一二　会易は絪縕し、神は其の天を活す、
一一三　天地は没露し、物は其の地を立す、
一一四　立する者は神の鬱浡に活す、
一一五　活する者は物の混淪に立す、故に
一一六　其の一を混成して、全偏に統散し、一二の經を用す、
一一七　其の二を粲立して、剖對し反比し、一一の緯を體す、故に
一一八　之に遡れば、則ち條理に從う、而して偏偏は全に歸す、
一一九　之を望めば、則ち對待を反す、而して偶偶は皆な合す、
一二〇　一を以て居を同くす、
一二一　二を以て道を異にす、
一二二　分を以て氣を均す、
一二三　合を以て物を反す、
一二四　本は一にして。而して一氣一物相い分る、
一二五　一性一體相い合す、

(PB 285)

(而を欠くか。)

一二六　試みに筆を援きて一畫を下すに。
一二七　纔かに一点を露せば。則ち上下既に立す。
一二八　上露せば則ち下成る。表成り裏従う。
一二九　表裏は上下の中に居る。
一三〇　上下は表裏の中に居る。
一三一　上下表裏は混成す。而して一畫は其の中に立つ。
一三二　是れ居は同じく道は異にして。
一三三　　氣は均しく物は反する所以なり。
一三四　物の反するを以て、而して露没自から異なるなり、
一三五　氣の均しきを以て、而して對に軒輊無し、
一三六*　且つ小を以て之を言うに。人　兩岸に立ちて各おの相い望めば。
一三七*　其の近遠隠見を爲すは、則ち各おの相い同じきなり、
一三八*　其の近遠隠見する所は、則ち互いに相い異なるなり、是を以て
一三九　物の没露と、
一四〇　氣の隠見と、
一四一　其の道を異にすと雖も、而も
一四二　其の居を同くす、故に
一四三－四四　物の没する所は、乃ち氣の見るる所なり、

一四五ー四六　氣の隠るる所は、乃ち物の露する所なり、
一四七　会昜は物に非ず。而して能く物に體す。故に
一四八　物は没露すれば、則ち
一四九　氣は隠見す、二の態なり。故に
一五〇　氣物は物を爲せば則ち没露す、
一五一　会昜は物を爲せば則ち隠見す、
一五二　氣は精にして没す、
一五三　物は麁にして露す、
一五四　麁なれば則ち氣も亦た見る、
一五五　精なれば則ち物も亦た没す、故に
一五六*　麁なれば則ち性物を見して華液を爲す、
一五七　精なれば則ち天地を没して天神を爲す、
一五八　氣は物を得て而して会昜は粲立す、
一五九　物は氣を以て而して天地は混成す、
一六〇　天地の混成するを以て、而して会に具する者は、必ず昜に具す、
一六一　会昜の粲立するを以て、而して会に具する者は、必ず昜に反す、
一六二　会昜は具を同するを以て、其の居を異にすること能わず、
一六三　会昜は具を反するを以て、其の道を同くすること能わず、

(PB 286)

(I 390a)

一六四　粲立すれば則ち一一平分す、
一六五　混成すれば則ち一一相融す、
一六六　平分すれば則ち彼此の發は同からず、
一六七　相融すれば則ち彼此の有は異ならず、是を以て
一六八*　地は結に成り、
一六九*　天は散に成ると雖も、然れども
一七〇　地は結に專らならば、則ち長じて天を盡さん、
一七一*　天は散に專らならば、則ち消して地を盡さん、是を以て
一七二―七三　散結は苟くも徒らなれば。則ち上は散を繼ぐ者無し、
　下は結を置く地無し、
一七四　之を桔槹に移すに。止れば則ち持にして直なり、無意以て動の用を具す、
　動けば則ち轉にして圓なり、自ら靜の復するを竢つ、
一七五―七六　之を碓に移すに。前を抑うれば則ち後ろ昂がる、天昂は人の抑うるに從う、
　前を揚ぐれば則ち後ろ低がる、人揚は天の低ぐるに期す、故に
一七七　進むを貪れば則ち忽ち退く、
一七八―七九　退くを欲せば則ち冥に進む、
一八〇　此に長ずれば則ち彼に消す、
一八一　東を傾くれば則ち西が欹つ、

混成すれば則ち一の有に非ざる無し、
一八六　粲立すれば則ち二の開に非ざる無し、
一八七　一は有し二は隠る、
一八八　二は開き一は移る、
一八九　剖くるや分れて二に之く、
一九〇　對するや合して一に歸す、
一九一　對すれば則ち会易は以て絪縕す、
一九二　剖すれば則ち天地は以て給資す、
一九三　絪縕に非ざれば、則ち会易を爲ること能わず、
一九四　給資に非ざれば、則ち天地を爲ること能わず、是に於て
一九五　立する者は氣物を露す、
一九六　活する者は本神を痕す、
一九七　氣なる者は天なり、之を活する者は神氣なり、
一九八　物なる者は地なり、之を立する者は本氣なり、
一九九　性體は氣物に和し、本根精英以て一を成す、
二〇〇　本根精英　既に立すれば、神は用を保營運爲に於て爲す、
二〇一　性體は氣物を隠し、本神天神以て二を成す、
二〇二　本神天神　既に活すれば、天は用を造化天命に於て成す、

二〇三―〇四　是に於て一は一一を散ず。而して。萬有は没露す、
二〇五　萬機は動止す、
二〇六　萬機は態を異にするも、唯だ鬱浡たり
二〇七　萬有は體を變にするも、唯だ混淪たり、
二〇八　混淪を立する者は、廼ち本氣なり、本根精英は、神に於て身す、
二〇九　鬱浡を活する者は、廼ち神氣なり、保營運爲は、物に於て神す
二一〇　之を爲する者は神なり、
二一一　是れ成する者は天なり、故に
二一二　性體氣物は、爲具なり、
二一三　会易天地は、成具なり、
二一四　剖析は盡きず、成する者も亦た爲す、
二一五　對待相い合す、爲する者も亦た成す、蓋し
二一六　一の立する所、其の物を幹立し、其の神を活運す、廼ち本と神となり、
二一七　二の活する所、一以て之を爲し、一以て成すなり、乃ち天と神となり、
二一八　一は有し二は居す、
二一九　一は活し一は立す、
二二〇　性體は氣物を貫す、
二二一　氣物は性體を割す

(I 390b)

(PB 288)

二二二*有せずんば爭でか居らん、
二二三活せずんば孰れか立たん、
二二四二を有すを以て　而して一移り二に居る、
二二五一の移るを以て　而して二は各一を全す　是に於て
二二六会は猶お昜の如し、
二二七小は猶お大の如し、
二二八猶如は遞いに反す。其の變は無窮なり。
二二九氣を本と爲す。
二三〇物を根と爲す。
二三一體を精と爲す。
二三二性を英と爲す。
二三三若し氣物體性の本根精英を爲すに非ずんば。
二三四則ち豈に相い依りて一を成せんや。
二三五人は麁物。麁に通じて精に泥す。
二三六故に但だ植の　本根精英を有するを見て。
二三七而して動も亦た本根精英を具するを見ず。
二三八但だ動植の本根精英を有するを見て。
二三九諸を大物に資るを識らず。

二四〇 氣物性體を以て成らざる者無ければ。
二四一 則ち往くとして本根精英を具せざる者無し。
二四二 至大は小を遺さず、
二四三ー四四 至精は麁を外にせず、一の徳なり。
二四五ー四六 人は渺たる麁小の智を以て。精没する者を探らんと欲するも。難し。
二四七ー四八 然りと雖も精麁は混一して。没露は居を同じくす。我何ぞ天地に外れん。
二四九ー五〇 故に合して一を成す。男女感じて而して子　其の中に成る所以なり。
二五一 條理は男女に於て立す。
二五二 罅縫は所生に於て没す。
二五三ー五四 分れて各おの立す。衆くの兄弟の體を一父母に分つ所以なり。
二五五 衆くの兄弟にして散ず、
二五六 一父母にして統ぶ、是の故に
二五七 物　立し、神　活する者は、此の天地を成す所なり、
二五八 性體合し　氣物分るる者は、此の天地を爲す者なり、
二五九 成は則ち爲に於て成し、
二六〇 爲は則ち成に於て爲すと雖も、
二六一 而も爲成は自から別なり。而して
二六二* 爲は成に先だち。成は爲に後るるに非ず。

(PB 289)

(I 391a)

二六三ー六四　故に天地に觀ること有らんと欲する者は須らく條理に繹ねて。以て混成に居るべきなり。

二六五　［剖對］＊朱書　流に沿うて下れば、則ち一易二会なり、

二六六　岸を隔てて望めば、則ち一易一会なり、故に

二六七　剖けば　則ち分分分分、零に至り碎に至る、末は猶お本のごとし、

二六八　對すれば則ち合合合合、二に歸し一に歸す、本は猶お末のごとし、

二六九　反して隻を執る、往く所に從いて而して反反對立す、

二七〇　比して偶に伴う、往く所に從いて而して類類相竝ぶ、

二七一　性の具するを以て、氣は能く之を有す、

＊二七二ー七三　才の能するを以て、物は能く之を行う　以て徳の有を觀る。

二七四　有すれば則ち物として宅せざる靡し、

二七五　往けば　則ち事として路せざる靡し、

二七六　行けば　則ち微として爲せざる靡し、

二七七　有すれば則ち一として成せざる靡し、是を以て

二七八　鬱浡は能く活し、

二七九　混淪は能く立す、

二八〇　性剖き體偶し、

二八一　氣有し物開きて、而して

二八二　一は萬有を含んで。而して

(PB 290)

二八三　動植は其の中に物す、
二八四　本神は其の中に氣す、
二八五　植は物に資るを以て　而して能く本に厚し、
二八六　動は神に資るを以て　而して能く神に厚し、
二八七　分れて隻を爲すと雖も　亦た能く合して一を成せば　則ち
二八八　物に資る者も亦た其の神を有し、
二八九　神に資る者も亦た其の本を有す、
二九〇ー九一　故に成れば則ち各おの執る有りと雖も。而も眇忽亦た能く大物と勢を張る。
二九二　勢を張れば則ち天地と分立す、
二九三　給資すれば則ち天地と混一す、
二九四　才は活して而して性は会易を見す、
二九五　體は立して而して物は天地を露す、
二九六　絪縕は神の運なり、
二九七　没露は物の立なり、
二九八　本根精英の物、
二九九　保營運爲の活、
三〇〇　活成り物成るは、乃ち二なり、
三〇一　活を成し物を成すは、二に非ず　故に

有は有り無は無し　是を以て没露は皆な有り、
隻と隻は相い闕く　是を以て反合は全を成す、

有せずして無なり、
具せずして闕なり、
闕くる者は其の具を具せずして闕く、
具する者は亦た其の闕を具して具す、
無は、其の有　有らずして無し、
有は、無無きを以て而して有る、
闕なる者は唯だ没なり、
無は則ち直ちに無なり、
有するを以て而して其の徳を一にす、
具するを以て而して其の道を二にす、是を以て
其の無き所は則ち無し、
其の闕く所は則ち闕く、是を以て
有中は無無し、
具中は具闕す、
有は、有中に有り、無を有せば則ち有中に非ず、
具は、闕中に具す、闕を闕けば則ち其具に非ず、故に

三〇二―〇三
三〇四―〇五
三〇六
三〇七
三〇八
三〇九
三一〇
三一一
三一二
三一三
三一四
三一五
三一六
三一七
三一八
三一九
三二〇
三二一

三二二　無は有に非ず。有して闕くるは則ち具中に在り。故に
三二三　闕闕相い得れば則ち全、闕は有中に在るを以てなり、
三二四　有は無を以て竝立せず、有は能く有を有すればなり、
三二五　蓋し氣に精没麁露の態有り。
三二六　露して有有り、
三二七　没して無有り、
三二八　無なる者は無にして後　無なり、
三二九　如し無にして有るは、則ち有の没なり、
三三〇－三一　同聲にして異主。之を闕と謂いて可なり。
*三三二－三三　混成は相い食すと雖も。之を相いと謂えば。則ち已に吐す。故に
三三四　没する者は遂に露せず。
三三五　無なる者は遂に有せず。
三三六　條理の見るるは則ち一の分なり、
三三七　罅縫の没するは則ち二の合なり、
三三八　反を以て而して彼此没露す、
三三九　比を以て而して彼此偕に有り、故に
三四〇　麁中。相い吐せば、則ち天は虚にして氣、地は實にして物なり、
三四一　相い食せば　則ち虚體も物を實し、實體も氣を虚す、唯だ

三四二　其の没は物の天を爲す、
三四三　其の露は氣の地を爲す、
三四四　罅縫を没し、
三四五　條理を見す、
三四六　剖析、之に沿えば則ち散ず、之に遡ぼれば則ち統ぶ、
三四七　對待、之を分てば則ち反す、之を合すれば則ち一す、
三四八　剖析は親疏を生ず、
三四九　對待は反比を成す、
*三五〇　親疏は疏を同すれば、之に資る者は一なり、
三五一　兒孫の愈よ衆ければ、則ち之に給する者は滋し、
三五二　親親は相い偶すれば、則ち其の反する者は合す、
三五三　疏疏は相い向かえば、則ち其の比する者は依る、
三五四　大は小に之けば、則ち小は大に資る、故に大の具する所、小も亦た之を具す、
*三五五　類類は比すれば、則ち彼と此は依る、故に此の乏しき所、彼れに仰ぐ有り、夫れ
三五六　氣物は元と性體を有す、
三五七　性體は終に氣物と剖す、
*三五八―五九　四にして二。二にして一。
*三六〇　是を以て一元の氣。鬱浡の神を活す、

(PB 292)

(則ちを欠くか。)

三六一　混淪の物を立す、
三六二　混淪は處を全す　本神は一を成す、
三六三　鬱滃は時を分つ　天神は二を成す、
三六四　氣は能く神を用して　而して宇宙能く容れ　轉持能く動く、
三六五　神は能く物に體して　而して天地能く立ち　水火能く著る、
三六六　物能く神を活す　而して本神能く活し　造化能く通ず、
三六七　天能く物を成す　而して本神能く一し　事物能く雜す、
三六八　神は本神を以て而して神す、
三六九　物は天地を以て而して體す、
三七〇　體體隔りて而して物す、
三七一　神神交りて而して事す、
三七二*　物は條理整齊の中に立す、
三七三　事は變化錯雜の間に行わる、
三七四　宙通宇塞　轉動持止　天散地結　華火液水　物以て成す、
三七五　神活本立　神爲天成　物定事變　造來化往　神以て爲す、
三七六　事物の間　鬼神は感應す、
三七七　造化の中　天命は當遇す、
三七八　活中　神の變は測られず　其の妙を觀る、

(PB 293)

(I 392a)

三七九
三八〇
三八一

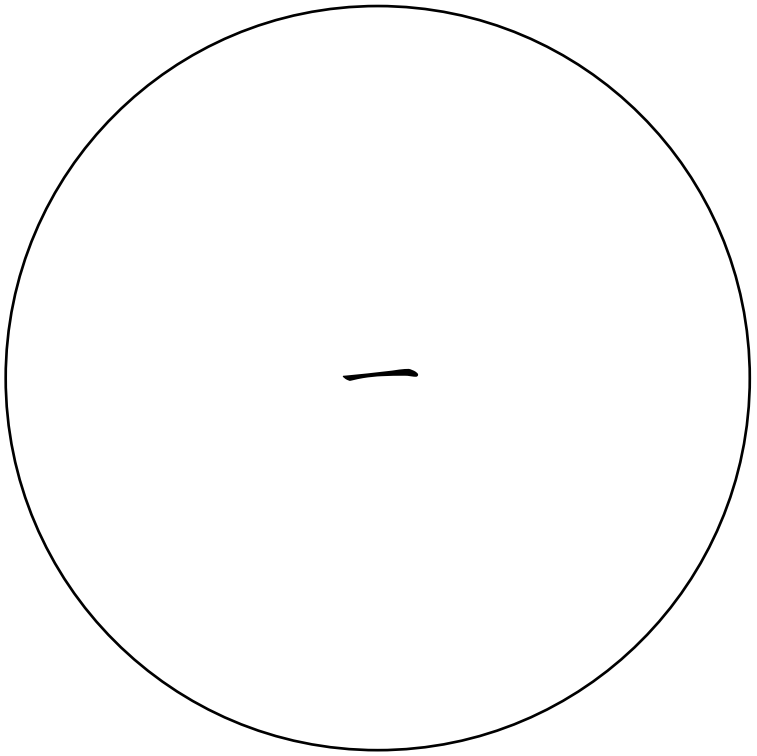
立中、天の常は揜われず、其の誠を觀る、是に於て
物は性中に居る、
性は物中に遊ぶ、

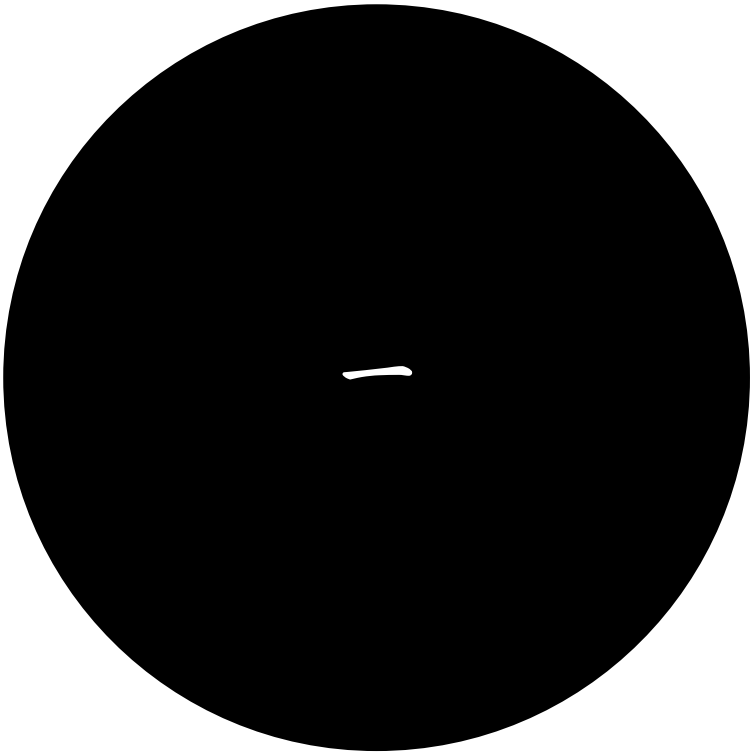
(PB 294)

一不上レ圖レ

一一相食混成圖一合

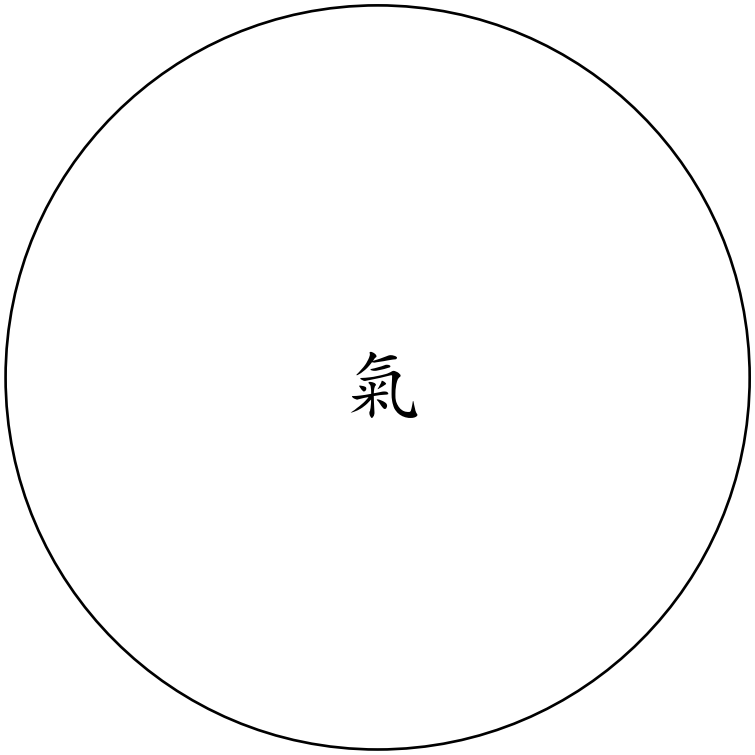
一一闕體
相食具性





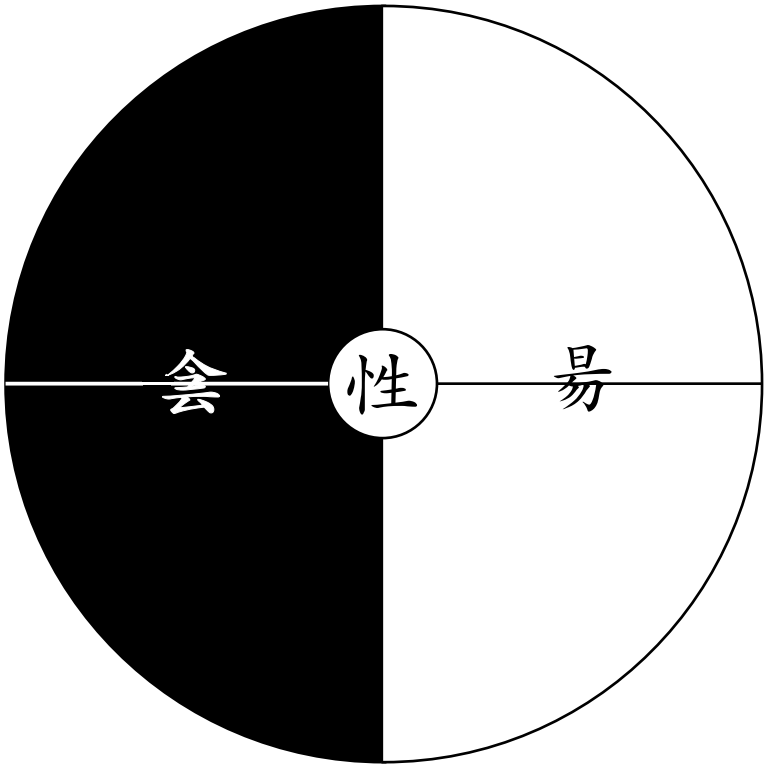
氣物相食混成圖一合

氣物即體謂之天地

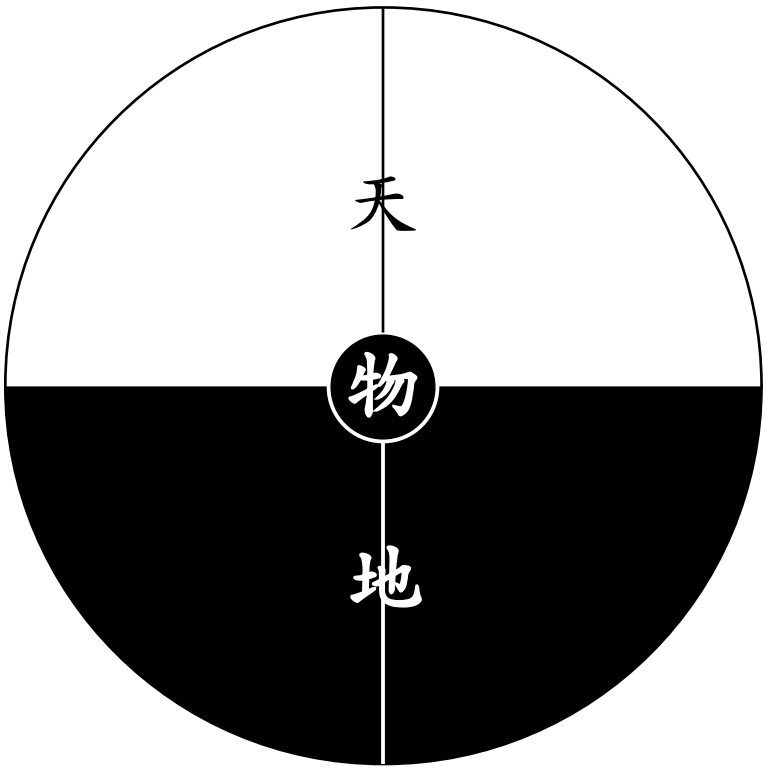


物

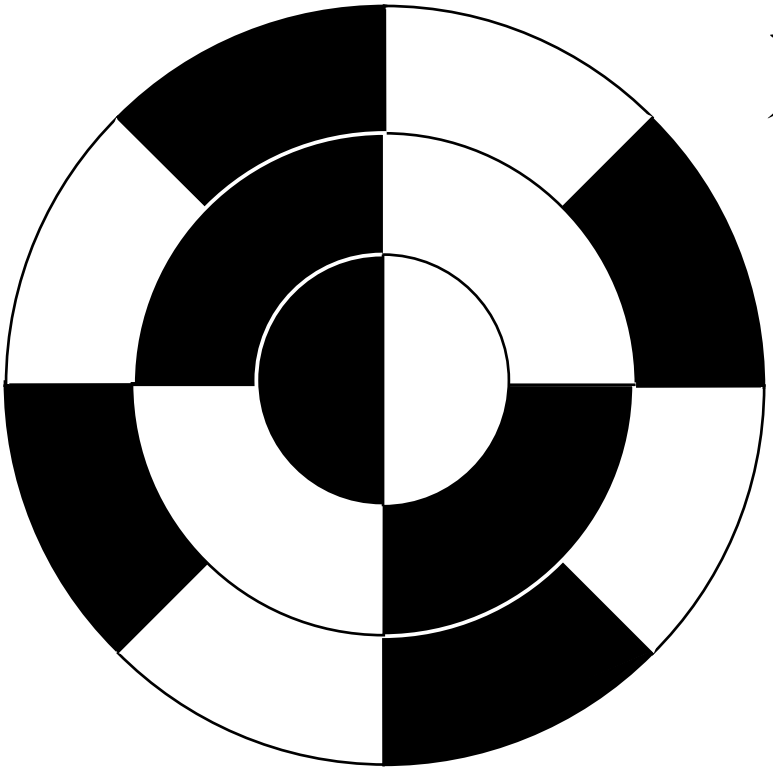
一一相吐粲立圖

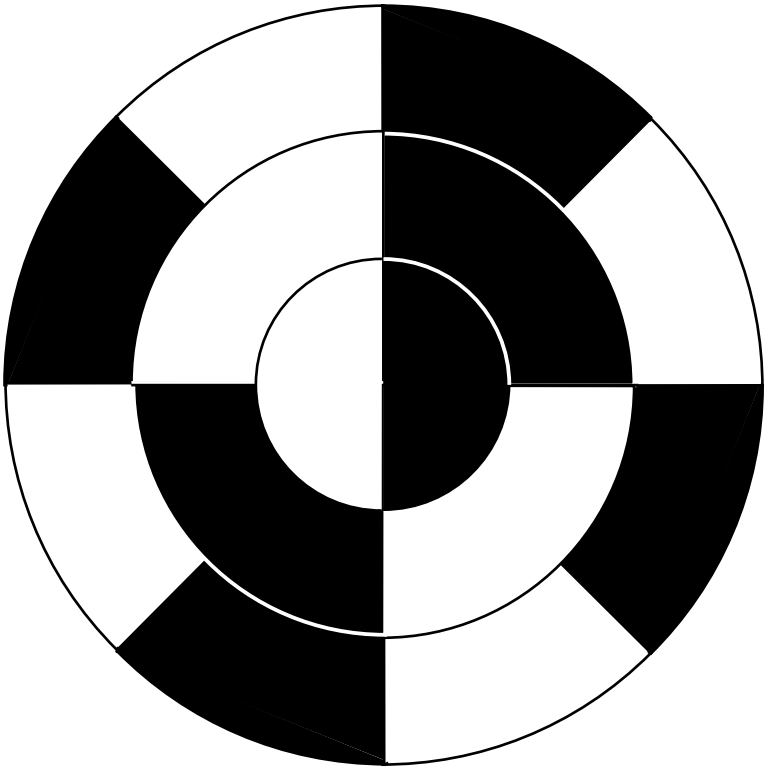


氣物相吐粲立圖

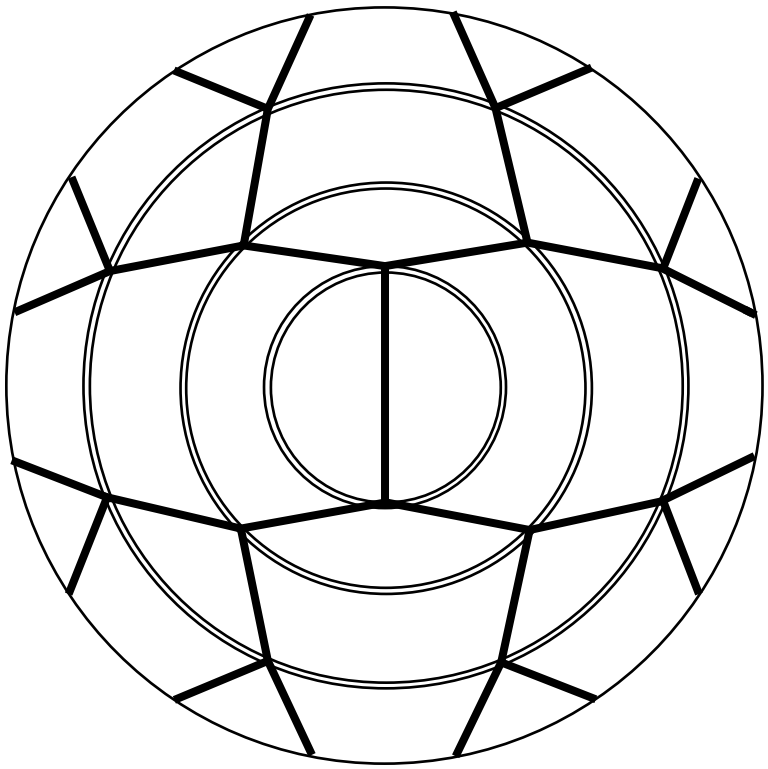


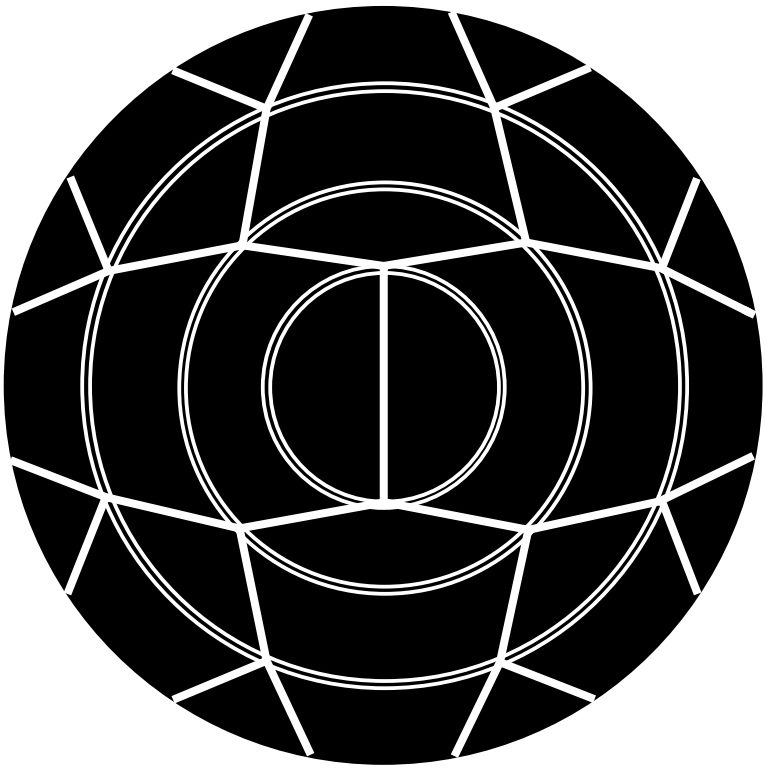
分合圖一合



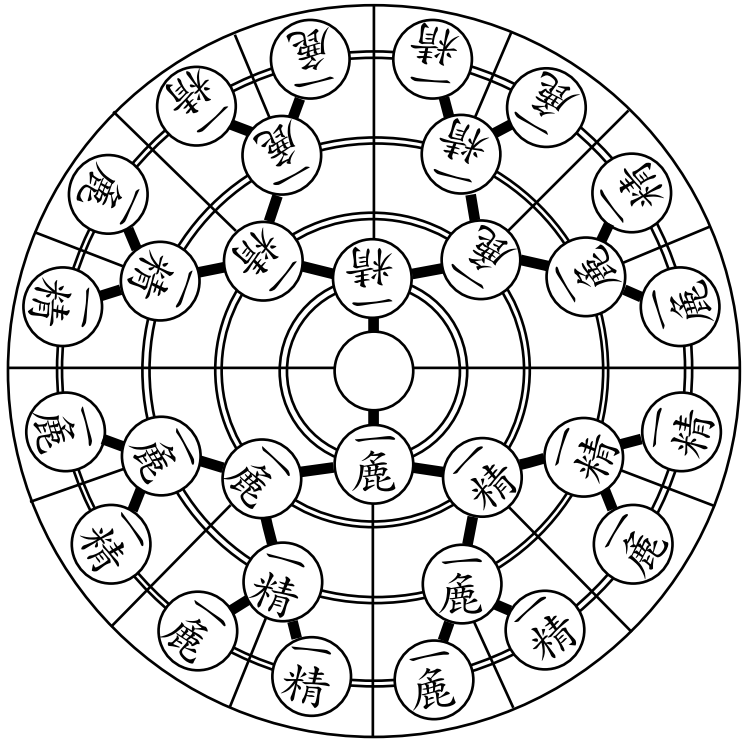


剖對反比圖一合



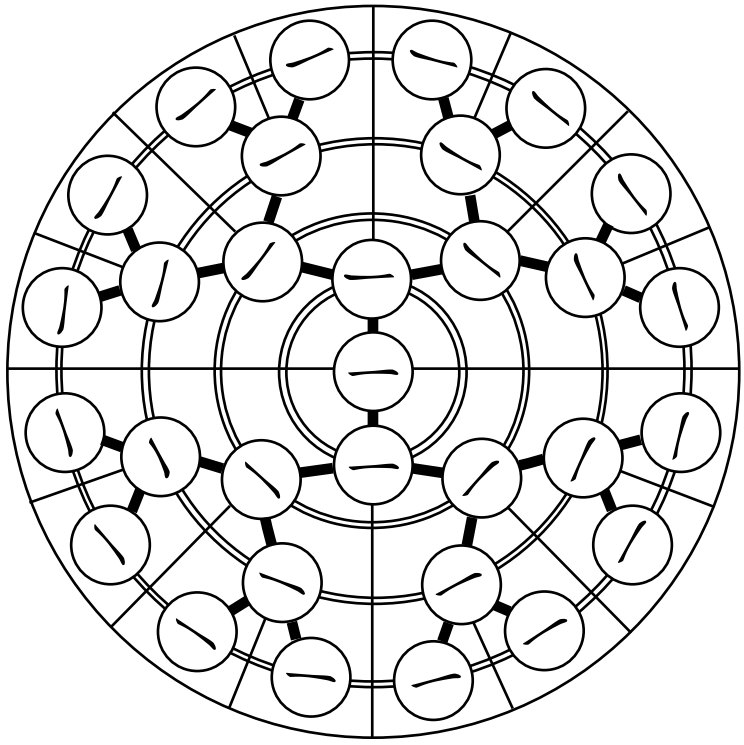


一一精麁圖

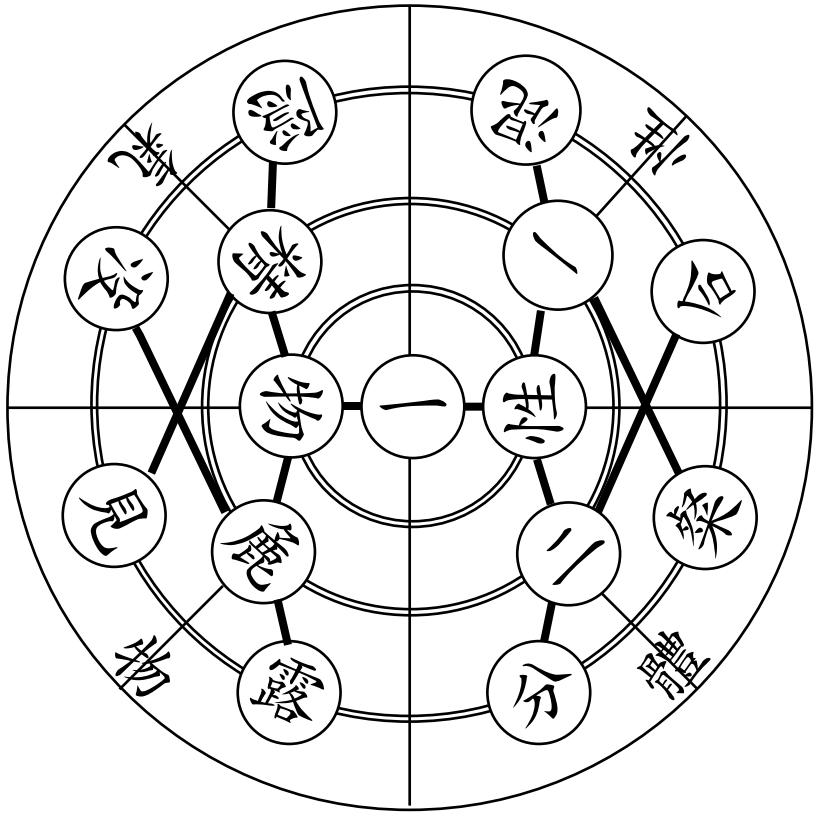


一一会易分合混粲偶一一之中
精麁天地隠見没露偶精麁之中

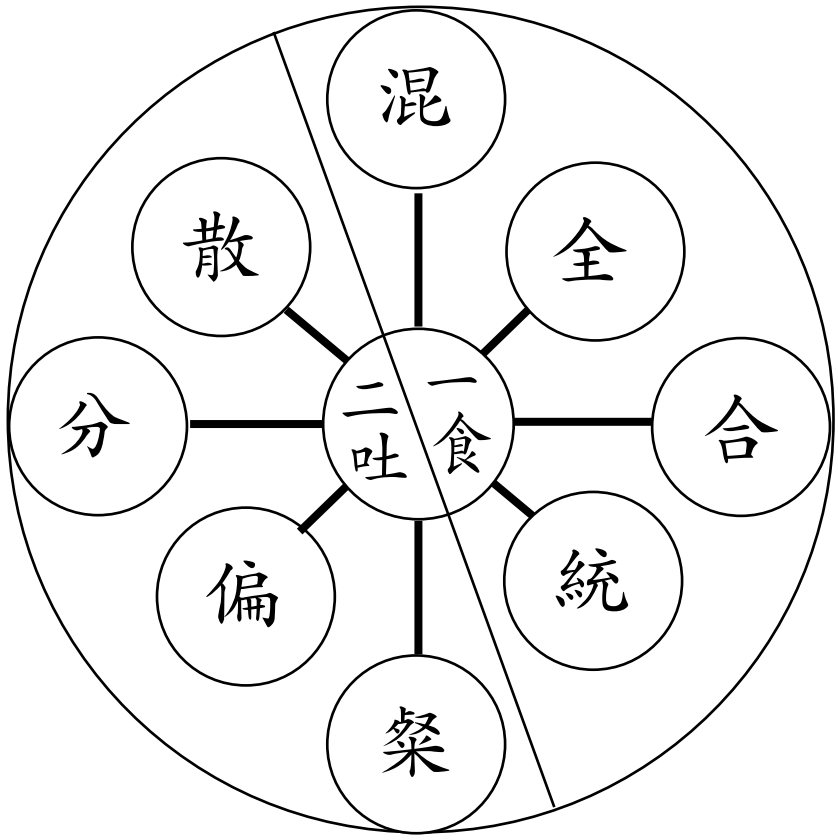
經緯剖對圖



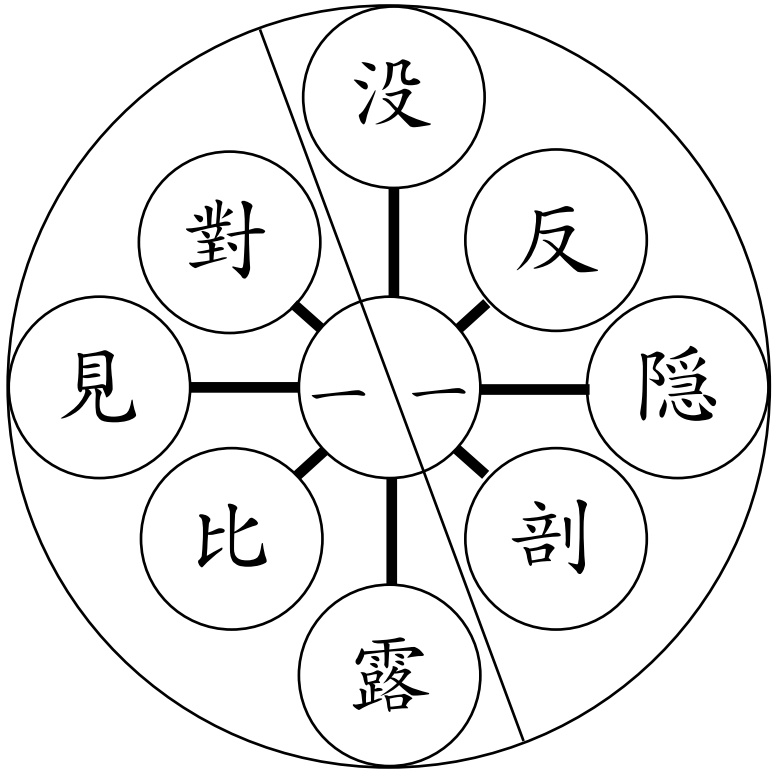
一二精麁圖



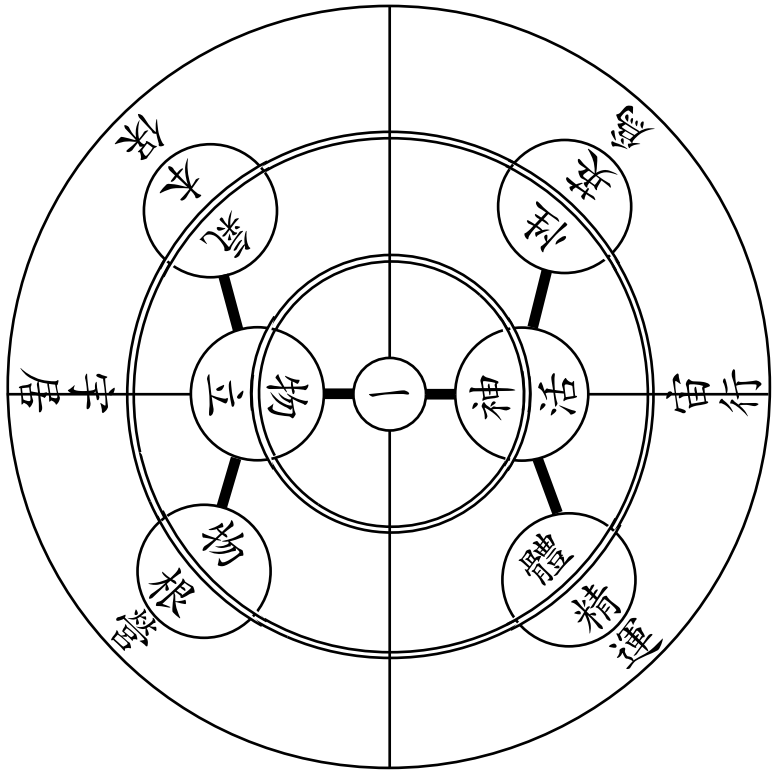
一二食吐圖



一一對待圖



神物活立圖

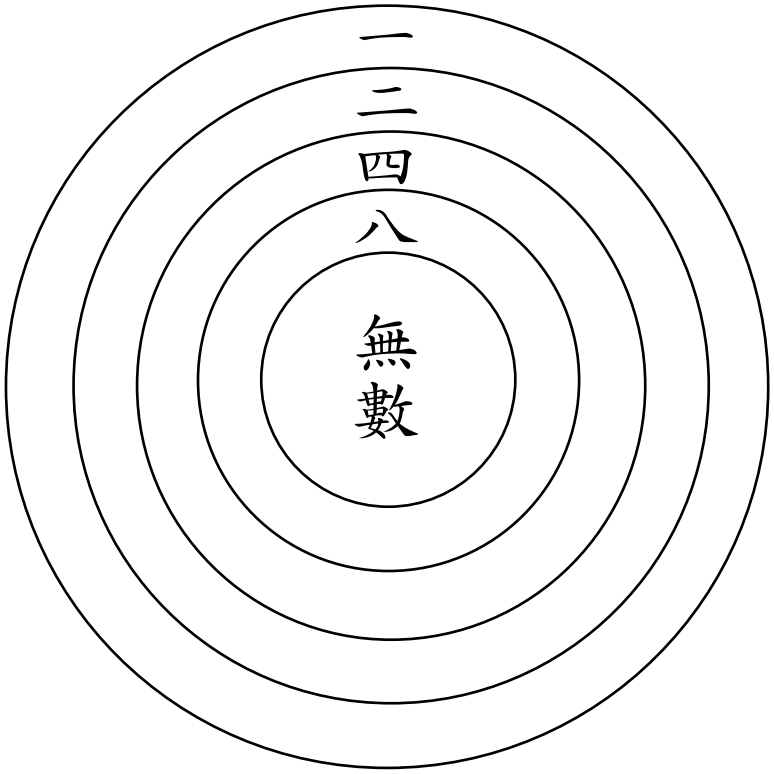


神物剖析圖

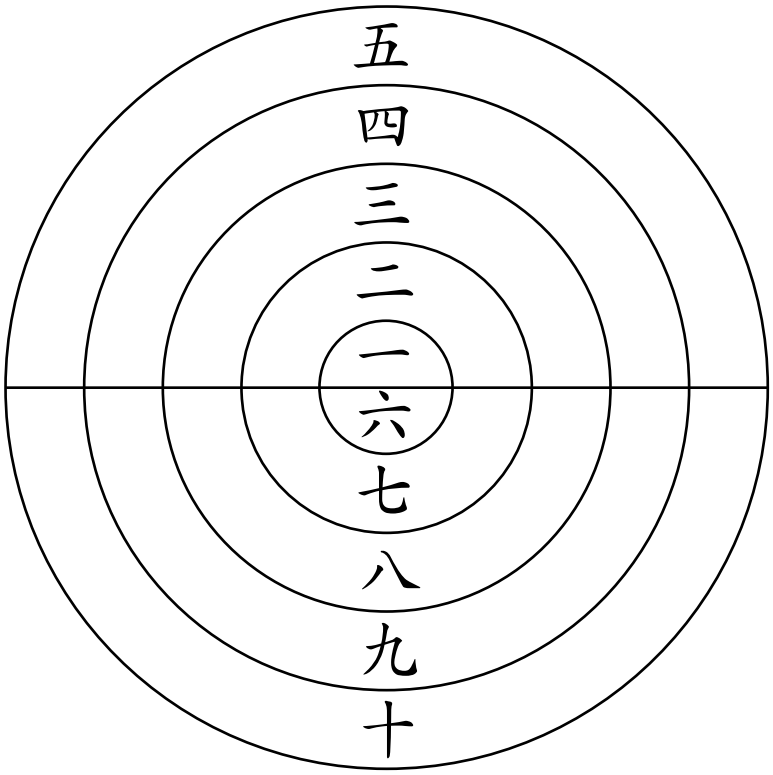
天神乃天冊二所說
天地乃地冊二所說

大給
日勿論
小鼻
出事二分

天數圖



人數圖



天地

四一〇　神は爲成に活す、
四一一　物は氣物に立す、
四一二　爲成は則ち天神なり、
四一三　氣物は則ち天地なり、
四一四　天神は則ち鬱浡の活、以て其の天を窺う、
四一五　天地は則ち混淪の立、以て其の地を觀る、
四一六　性は一一を剖く、
四一七　物は精麁を開く、
四一八*　一一は分合混粲を爲す、
四一九　精麁は没露隠見を成す、是に於てか。
四二〇　氣は能く精没す、
四二一　物は能く麁露す、
四二二　精没は則ち神の體なり、
四二三　麁露は則ち物の體なり、
四二四　麁露すと雖も亦た没露す、
四二五*　精没すと雖も亦た隠見す、
四二六*　見わる者は没を以て其の地と爲す、

［天地］*朱筆

四*二七　露する者は隠を以て其の天と爲す、
四*二八　神にして見る、
四*二九　物にして露す、
四*二九1（復元）　露は其の没に宅し　見は其の隠に路す、
四三〇－三一　神は本と氣にして。而して氣なる者は天なり、
四三二　物なる者は地なり、
四三三　神と物は共に物にして。而して
四三四　天は其の宅路を爲せば。則ち天は亦た地にして。
四三五　而して地は其の開く所の戸、
四三六　閉る所の室を并せ食めば　則ち終に萬有を食んで盡くす。
四*三七　盡る處に就きて強いて漠然無朕たる者を勾す。其の勾す可からざる者を勾して。
四三八　以て之を觀れば。舊に仍りて氣にして天なり。仍りて天境に入る。
四*三九　結を解き聚を散ずれば。則ち藐焉の中。氣を觀て物を觀ず。
四四〇　以て天の地を食み盡くすを觀る。是に於て彼と此は各おの隻を爲す。
四四一　隻は互いに隻を吐す、
四四二　隻は互いに隻を食す、
四四三　遂に天の混成を觀、
四四四　地の混成を觀、以て一に混成するを觀る。

(PB 319)

四四五　［四界］＊朱筆　故に萬有は皆な麁なり。精は麁中に居る。
四四六　食めば則ち氣ならざる靡く、物ならざる靡し、
四四七　吐けば則ち物は氣ならず、氣は物ならず、
四四八　氣は一一を開きて。精没麁露す。
四四九　人の覆載に在るや。麁を以て麁に居る。
四五〇ー五一　麁に慣れて而して精に慣れず。麁を獲て而して精に遺す。
四五二　分るれば則ち天は能く地を容る、
四五三　地は能く天に居る、
四五四　天は地より大なり、
四五五ー五六　地は天より小なり　是を以て地ならざるの處は乃ち天なり、
四五七　天ならざるの處は乃ち地なり、
四五八　合すれば則ち天も亦た地に居る、
四五九　地も亦た天に居る、
四六〇　天は地より大ならず、
四六一ー六二　地は天より小ならず、　是を以て地ならざる所莫し、
四六三　天ならざる所莫し、
四六四　一にして二、
四六五　二にして一、

(I 392b)

(PB 320)

四六六　通隔の間。端倪す可からず。
四六七　鬱滃は行わるれば則ち路を開く、
四六八　混淪は居れば　則ち宅を有す、
四六九ー七〇　宅路は麁中に没し。精は天機を見す、
*四七一　麁は氣物を露す、
*四七二　没すと雖も、而も衰衰の通。
*四七三　坱坱の塞。宇宙を成す、
四七四　機は既に動止の轉持を見す、
四七五ー七六　形は能く直圓の形理を成す、是に於て動靜の天地を没成す、
四七七　體は能く氣物の天地を立す、
四七八ー七九　性は能く華液の会易を活す、是に於て體性の天地を露成す、
四八〇ー八一　蓋し清を以て濁を望めば。氣は清にして散ず、
物は濁にして結ぶ、
四八二　火は發して懸る、
四八三　水は收めて湛う、
四八四　火は發すと雖も、而も終古升らざるは、覆う者の有るに由る、
四八五　水は收むと雖も、而も終古沈まざるは、載る者の有るに由る、
*四八六　故に通塞散結して。幽玄の界に入る。
*四八七ー八八

四八九ー九〇　上覆下載の際は。日月星辰は懸る、
四九一　山嶽河海は列す、
四九二　晝夜冬夏は以て成る、
四九三ー九四　東西南北は以て紀す、
四九五　文章燦爛。萬彙鬱郁。
四九六　神は遊ぶ、
四九七ー九八　物は居る、是に於て天なる者は氣なり、木を成す、
四九九　地なる者は物なり、根を成す、
*五〇〇　物　其の氣を見すは、性なり、英を成す、
五〇一ー〇二　天　其の物を形にするは、體なり、精を成す、覆載は以て混成す。
五〇三［二説四界］*朱筆　機は動す、靜を以って實を置く、
五〇四　體は實す、虚に由りて機を發す、
五〇五　虚にして其の色を物にす、
*五〇六ー〇七　實にして其の性を質にす、天地は發收の偶を得る。（發收は安永本からの復元）
五〇八　是に於て精中は通塞す、
五〇九ー一〇　麁中は轉持す、以て其の天地を體を没するに於て成す、
五一一　實中は散結す、
五一二ー一三　虚中は發收す、以て其の天地を物を露するに於て成す、

(PB 321)

(PB 322)

五一四　[三説四界]*朱筆經は通じて時し　來る者を生じ
五一五*　往く者を化し　神通の路を爲す　此の天を宙と爲す
五一六　緯は塞して處し　乘る者を載せ
五一七　居る者を容れ　物立の地を爲す　此の地を宇と爲す
五一八　宇は能く物を容れ
五一九ー二〇　宙は能く神を通ずれば　則ち宇宙は隱没し　能く神物を容る
五二一　物は能く宇に居り
五二二ー二三　神は能く宙に通ずれば　則ち神物は見露し　能く宇宙に居る　是に於て
五二四　隱没は物を吐して而して地と爲す
五二五　見露は氣を吐して而して天と爲す
五二六　神物は活立せざる靡し
五二七　經緯は通塞せざる靡し
五二八ー二九　巧婦は機杼を執りて。斯の貝錦を織る。燦爛たる文章。龍は飛び鳳は翔く。
五三〇　鬱滃は機を含む
五三一　混淪は體を立す
五三二　天は定り神は變ず
五三三　天は動き地は止る
五三四　蓋し混然の一。性は一一の體を具す。

(I 393a)

五三五　其の體は則ち一氣一物なり、
五三六　其の態は則ち精没麁露なり、
五三七　相い比し相い反す、
五三八　相い食し相い吐す、
五三九　粲立して條理を有す、
五四〇　混成して罅縫を没す　故に
五四一ー四二　坱坱は處を敷く　而して物は此に居る　而して物の此に居るや、
五四三　中を得て之に乗る、
五四四　外を得て之に居る、
五四五　中や則ち其の微は内無し　天地を載せて而して重とせず、
五四六ー四七　外や則ち其の廣は際無し　天地を容れて而して大とせず、
五四八　衮衮は時を引く　而して期は此に従う　而して期の此に従うや、
五四九　今を得て之を見す、
五五〇　端を得て之を没す、
五五一　今や則ち其の間　倏忽　事物を露して而して遺さず、
五五二　端や則ち其の長　攸遠　事物を藏して而して示す無し、
五五三　神は亦た此の途に行く、
五五四　天は亦た此の宅に居る、
　　夫れ性は體を開く。而して一会一易なり。
　　易は則ち其の體を虚し　其の氣を發す　神機は活動す、

(PB 323)

五五五　会は則ち其の體を實し　其の氣を收む　物體は定立す、
五五六　天地は此を以て分る、
五五七　水火は此を以て成る、　是を以て
五五八*　宅を成して物を有する者は靜なり、　靜なる者は沒す、
五五九　散結する者は、以て虛實の體を露す、
五六〇　路を爲して機に由る者は動なり、　動なる者は見る、
五六一―六二　發收する者は、以て色性の氣を見す　是に於て靜なる者は虛實す、
五六三　　動なる者は往來す、
五六四　中は止まること有りて而して能く維す、諸動は游移すと雖も、而も
五六五　守る所有りて、　以って地を定め天を定む、
五六六　止の在る所は、乃ち地なり、
五六七　動の行る所は、乃ち天なり、
五六八　今は見ること有りて而して能く走る　諸靜は凝立すと雖も　而も
五六九　率いる所有りて、而して時を變じ物を變ず、
五七〇　體の成る所は、乃ち天なり、
五七一　爲の變す所は、乃ち神なり、
五七二　宇宙は氣なり、
五七三　天地は物なり、

五七四 天は天機を剖す、
五七五* 物は物體に分る、
五七六 天機は已に分る、而して宇宙轉持は相い成る、
五七七* 物體は已に分る、而して天地水火は竝び立つ、是に於て
五七八 虚實の天地、
五七九* 水火の会易、
五八〇 時處の宇宙、
五八一 動止の轉持、
五八二* 偶偶相い合して。一天地を成す。

(PB 324)

五八三 [四説四界*朱筆] 氣は宇宙を開き、而して轉持を容る、
五八四ー八五 隱然の天は、立つ所の位、行く所の方、設け、
五八六ー八七 氣を運ぶの理、物を成すの形、立す、
五八八 物は天地を開く、而して水火を見す
五八九ー九〇* 粲然の地は、容る所の虚と、居る所の實分れ、
五九一ー九二* 緼する所の華、絪する所の液、見る（自筆は陽、陰。華と液に訂正されている。）
五九三 其の合するや、宇宙は隱る、而して虚實の體を露す、
五九四* 轉持は没す、而して華液の性を見す（陰陽。華液に訂正されている。）
五九五 動く者は神にして變ず、

五九六　止る者は天にして定る　是の故に
五九七　地は止りて定る　而して其の地は磅礴を以て界を爲さず、
五九八　天は動きて變ず　而して其の天は穹窿を以て界を爲さず　故に
五九九ー〇〇　坱坱は常に靜にして　轉動は其の中に遊ぶ　運轉は守有り、
六〇一　升降は中有り、
六〇二ー〇三　衰衰は常に走りて、　靜止は其の中に居る　回復は期を俟す、
六〇四　游動は態を變ず　是に於て
六〇五ー〇六　動は變ずと雖も　而も靜を得て而して紀を有す　天は定り地は定る、
六〇七ー〇八　靜は定ると雖も　而も動を得て而して能く活す　氣は變じ物は換る　是を以て
六〇九　天は物に變じて　而して期に定る、
六一〇　地は物に定りて　而して期に變ず、
六一一　天神の天地に於て爲成する所なり。
六一二　天地は輕虛　以て没す、
六一三　重實　以て露す、
六一四　質を以て氣を言えば　質は實なり　氣は虛なり、
六一五　氣を以て質を言えば　氣は精なり　質は麁なり、
六一六　氣に精なる者は　質に虛す、
六一七　氣に麁なる者は　質に實す　是を以て

(PB 325)

六一八　氣は層層を出でて而して漸みて精す、
六一九　質は重重に入りて而して愈いよ實す、
六二〇*　之を火は體の虛を以て而して出でて升り、
六二一　　水は質の密を以て而して降りて入るに徵す、
六二二　氣は闃として聲臭の窺う可き無し　而して
六二三　地をして能く其の中に在らしむれば、則ち精なり、虛なり、
六二四　質は密にして罅隙の指す可き無し　而して
六二五　氣をして能く其の中に在らしむれば、則ち麁なり、實なり、
六二六　天は能く地に在る、
六二七　地は能く天に居る、
六二八　麁ならざれば、則ち精は其の間に在ること能わず、
六二九　虛ならざれば、則ち實は其の中に居ること能わず、
六三〇　精は麁中に通ず、
六三一　實は虛中に塞る、
六三二　氣象は轉中の物を爲す、
六三三　氣質は持中の物を爲す、
六三四　天象は猶お地質のごとし　精たらんとするを以て而して實すること能わず、
六三五　地氣は猶お天氣のごとし　實せんとするを以て　而して精たること能わず、

六三六　無質は、有質の氣なり、
六三七　有質は、無質の質なり、故に
六三八　塵埃は氣の爲めに揚げらるると雖も、而も質有れば則ち終に降る、
六三九　雲煙は氣を以て而して升ると雖も、而も質結べば則ち必ず降る、
六四〇　升る者は動、
六四一　降る者は靜なり、
六四二　動なる者は氣にして然ら使む、
六四三　靜なる者は質にして自ら然る、故に
六四四　質なる者は地の體、外出を拒みて、而して之を内に保つ、
六四五　氣なる者は天の體、内入を拒みて、而して之を外に送る、故に
六四六　煙火雲霧、氣に勝る者は疾く升る、
六四七　土石雨雪、質に勝る者は先に降る、
六四八－四九　持を推し轉を察するに。象は猶お質のごとし、東は猶お下のごとし、
六五〇　轉は猶お持のごとし、西は猶お上のごとし、
六五一　天神は、變動、以て活す、
六五二　定常、以て成る、是を以て
六五三　坱坱の中、物體は、濁實重凝して而して下に結ぶ、
六五四－五五　物氣は、清虚輕融して而して上に散ず、故に地體は沈結す、

六五六　　愈いよ密に愈いよ堅し、
六五七　堅密は中に依れば、則ち麁輭は精に之きて而して天を成す、
六五八　衮衮の間、神性は、運轉嘽喎して而して斯に率ゆ、
六五九ー六〇　物期は、循環鱗比して而して退き逝く、故に天氣は轉動す、
六六一　　愈いよ疾に愈いよ剛なり、
六六二　疾剛は表を保せば、則ち運緩は靜に之きて而して地を成す、
六六三　轉は衮衮を紀す、
六六四ー六五　地は坱坱を紀す、是を以て、轉は物を拒みて而して容れざるの内なり、
六六六　　地は物を載せて而して沈まざるの間なり、
六六七　景影は處を布きて、星辰は上に環る、
六六八　水燥は物を容れて、動植は下に立つ、
六六九　循環鱗比。期は競いて時を追う。
六七〇　天氣は動なり、
六七一　地體は靜なり、
六七二　動は能く象を率いて轉ず、
六七三　靜は能く質を容れて持す、
六七四*　地は端を天に於て寓す、
六七五　天は中を地に於て寄す、

(PB 327)

六七六
六七七ー七八
六七九
六八〇
六八一
六八二
六八三
六八四
六八五
六八六
六八七
六八八
六八九
六九〇ー九一
六九二
六九三
六九四
六九五

天は中を守る、故に動して遂せず、
地は端を奉ず、故に靜して躍せず、故に地は靜と雖も、而も氣は其の中に活す、
天は動と雖も、而も位は其の中を守る、（I 394b）

地は天を載す、
天は地を覆う、
其の間は。乃ち日月星辰は行く。
山嶽河海は列す。
推遷轉持は成る。
風雨雷霆は旋る。
水火艸木は生化す。
毛羽鱗介は出没す。故に
其の象を目して。其の機を臆せば。則ち天は亦た度る可きなり。
其の物を摩りて。其の體を踏めば。則ち地は亦た知る可きなり。
夫れ黒白の棊子。勝敗相い成る者は。諸を局に託すればなり。
今　氣と體は何に物し、
　天と神は何に事す、
人の天地に於るや、亦た其の幕席のみなり。
堂に囿せらる者は幕席の由來する所を知らず。

六九六ー九七　幕席の由來する所を知らざれば。則ち幕席を知らざるなり。
六九八　故に天地に囿せらる者は。則ち天地を知る能わざるなり。
六九九　天神は宙通の間に運す、
七〇〇　天地は宇塞の中に居る、
七〇一　天地を除きて而して其の容者の坱坱を觀る、
七〇二　坱坱に充てて而して其の混淪の立を觀る
七〇三　粲立を以て之を觀れば、氣は氣なり、
七〇四　物は物なり、
七〇五　混成を以て之を觀れば、物も亦た氣なり、
七〇六　氣も亦た物なり、
七〇七　是を以て氣は體を露せずと雖も。物を容れて之を居く。故に
七〇八　燥は燥の處を天に假りて、水と相い拒む、
七〇九　轉は轉の處を天に假りて、持と相い拒む　故に
七一〇ー一一　容る者は其の處を施さざれば、則ち居る者は其の宅を得ず、
七一二ー一三　居る者の其の宅を得るは、則ち容る者の其の處を施せばなり、
七一四　然り而して容る者は坱坱たれば、則ち
七一五*　居る者は無垠なり、是を以て
七一六　居る者は容る者より小ならず、

七一七　容る者は居る者より大ならず、故に
七一八　氣は物に之けば、則ち氣ならざる所莫し、
七一九　體は天に之けば、則ち物ならざる所莫し、
七二〇　歳時を除きて而して其の率いる者の衰衰を觀る、
七二一　衰衰に從いて而して其の絡繹の盡きざるを觀る、
七二二　直往は標本を見ず、
七二三　圓轉は首尾を得ず、果たして端緒有らば。則ち
七二四　始に前なる所、終に後なる所を以て、將に何をか置んとす、
七二五　内に内なる所、外に外なる所を以て、將に如何か觀んとす、故に
七二六　我れ北なれば則ち南は邊を爲す、
（書き損じを正す。）
七二七　我れ南なれば則ち北は邊を爲す、是を以て
七二八　世世相い望めば、則ち既往を今に於て觀る、
七二九　時時相い繼げば、則ち將來を今に於て觀る、
七三〇　時は始終を得可くんば、
七三一　處は其れ際涯有らん、
七三二　往けば則ち從いて之を送る、
七三三　來れば則ち逆いて之を迎う、
七三四　高ければ則ち登りて之を望む、

(I 395a)

七三五　深ければ則ち入りて此を度る、
七三六　竊竊として宇宙を疑う者の爲なり。
七三七　此に融して而して天の洋洋を觀る、
七三八　此に活して而して神の滂滂を觀る、
七三九　天は散じ地は結ぶ、
七四〇　氣は動き物は止る、
七四一　没する者は虚す、
七四二　露する者は實す、
七四三　見わる者は濁、
七四四　隠るる者は清、
七四五　之の問。清虚止散する者は精なり、
七四六　有痕は則ち麁なり、
七四七　無痕は則ち精なり、
七四八ー四九　有痕を以て無痕を推せば。則ち無痕も痕を成す。而して精も亦た麁なり。
七五〇　故に露を以て没を索れば、則ち没も亦た露す、
七五一*　麁を以て虚を推せば、則ち虚も亦た實す、
七五二　精の極は精を失す、而して精の麁なる者は、麁と相居る、
七五三　虚の極は虚を失す、而して虚の實なる者は、實と粲立す、

(PB 329)

七五四ー五五　清濁動靜。聚散解結。往く所　皆な然り。故に
七五六　動實濁結、
七五七　靜虛清散、
七五八　麁なる者は各各露す、
七五九　精なる者は盡く没す　然りと雖も
七六〇ー六一　散は虛に混せず。清は靜に混せず。
七六二　靜は動の爲に推さる、
七六三　虛は實の爲に推さる、
七六四　以て相い融せず。終に粲立を爲す。
七六五　粲立は混成に隔たる、
七六六　混成は粲立に別たる、　是を以て
七六七*　一一竝び見れて、而して精も亦た同じく露す。
七六八*　一なり難き者は、乃ち二の條理なり、　（條理を粲立に訂正傍記。）
七六九　二なり難き者は、乃ち一の混成なり、
七七〇ー〇七　濁實動結は、麁なり、精は麁中に隠る、
七七二*　　麁は精中に居る、　是に於て
七七三　坱坱は中を得て、而して天地は虛實を以て之に居る、
七七四　衮衮は今を得て、而して象質は歳運を以て之に行く、

七七五　神は物と反すと雖も。而も能く一を合す。故に
七七六　其の性は融して此に通ず、
七七七　其の道は爲して此に成す　故に
七七八　天地は位を開きて　而して
七七九　水火は物を分つ、
七八〇　天は虚なり　虚中は虚を以て見る可きの形を成す、　（七八二と対。）
七八一　或いは象と曰い、或いは火と曰い、或いは昜と曰う、今　新たに命じて華と曰う、　(PB 330)
七八二　實外は實を以て弄す可きの體を成す、　（行頭、地は實なり　を欠くか。）
七八三　或いは質と曰い、或いは水と曰い、或いは会と曰う、今　新たに命じて液と曰う、
七八四－八五　宜しく其の對を弄して。其の物を初にすべし。
七八六　聲を以て其の主に眩まされんことを要す。　(I 395b)
七八七　象質と曰い。水火と曰い。会昜と曰う。
七八八*　既に專主有れば。華液の新名。以て專稱す可し。
七八九　水火の本名。地に著く者を以て主と爲す。
七九〇－九一　故に日を以て火の宗と爲すは。其の實に獲て。而して其の名に失す。
七九二　象なる者は其の體を虚にして。見る可き者有るの名なり。
七九三　質なる者は其の體を實にして。把る可き者有るの名なり。
七九四－九七　而して水は猶お氣類にして。未だ定質を成さず。則ち質の專主に非ず。

七九八　故に天地に合して之を謂えば。水は地上に在り、
七九九　　日は天中に在り、然れば則ち
八〇〇　天火は影を得て而して偶す、
八〇一　地水は燥を得て而して偶す、故に
八〇二　火の水と地上に於て偶するは。固より疏偶なり。
八〇三　水火は天地に於て望んで。而して後　親偶を爲す。
八〇四　然れども名を親偶に於て正せば。則ち天日地火。還って其の主を失す。
八〇五　会易はもと一一の體なり。
八〇六　今　大物は天地を露す、
八〇七　　一氣は会易を見す、
八〇八　本づく所に推して。以て華液を言う。
八〇九　華液は自から其の偶有り。
八一〇　偶の素に就きて、氣象氣質を曰う、
八一一　其の成に就きて、日影水燥を曰う　故に
八一二　之を天地に通じて之を觀るに。
八一三　日　易にして喩えば、則ち露を天間に結ぶ、之を命じて月と曰う、
八一四　水は会にして排せば、則ち星を地際に生ず、之を命じて火と曰う、
八一五　天地は本と一物、故に華液は会易を爲す、

八一六　天地は既に境を分つ　故に
八一七　華は氣象の日影に偶す、
八一八　液は氣質の水燥に偶す、
八一九ー二〇　人目は素より麁なり。物を視て氣を視ず。見るに従いて其の疏偶を獲る。
八二一　天に日月と曰う。地に水火と曰う。故に
八二二　世人は未だ日に對するを以て地水便ち是れ月と曰わざると雖も。
八二三　水に對して宜しく天日便ち是れ火と曰うべし。
八二四　華液は則ち天地に合するの水火なり。
八二五ー二六　聲に依りて聽を誤るは。未だ其の主を知る者と爲さざるなり。
八二七ー二八　是れ一大全物を以て言う者なり。其の剖析する所を觀れば。則ち兩圈相い容る。
八二九　轉ずる所の圈は、卽ち地圈なり、
八三〇　運する所の圈は、卽ち天圈なり、
八三一　轉圈は則ち天地と巔趺を合す、
八三二　運圈は則ち天地と巔趺を反す、
八三三　運轉環守は理を同じくせず。
八三四　地趺は、乃ち天巔なり、
八三五　天趺は、乃ち地巔なり、
八三六　運軸は節を有す。以て日月の弧を繫ぐ。

(I 396a)

八三七　弦弧は既に設く。地は轉弦の中に居る、
八三八　　日は日弧の中に繫る
八三九　物體は天地に於て結ぶ、
八四〇　性氣は会易に於て發す、
八四一　性體相い下らず。節は以て枝を出だす。
八四二　同胞孿胎は。天地一球なり、
八四三　　華液連環なり、
八四四　華圈は圓を天地に於て分つ、
八四五　液圈は圓を天地に於て合す、
八四六　合すと雖も天地は自から天地の一球なり、
八四七　　華液は自から華液の二圈なり、
八四八　天地一球は路宅を合す、
八四九　華液雙圈は歲運を交う　蓋し
八五〇　天地の大分。没中は宇宙轉持を有す、
八五一　　露中は天地華液を有す、
八五二　宇宙は通塞を爲す。而して宙は宇中に通ずれば。
八五三－五四　則ち宇は邈たり混たり一を混成す。宇中　天地の體、
八五五　轉持の機、二圓相い合して、宇に居り宙に行く。

(PB 332)

八五六　華液兩圈と雖も。液圈は則ち天地に合す。
八五七　液は天地に洽せば。則ち日影は自から規矩を出でて。
八五八　以て中外を成す。己れ其の天に居る。影を以て其の地と爲し。
八五九　抗然として天地と弦弧の勢を張る。
八六〇　運轉は巔趺を反す。其の圓は合す。
八六一　日影は圈を分つ。巔趺は運轉と同じからざるなり。
八六二　蓋し物の成。形體色氣を以て全なり。
八六三　是を以て形體得ざれば。則ち物成る能わず。
八六四　色氣得ざれば、則ち物は没露する能わず。而して
八六五ー六六　色氣の成る所は。華液に於て濃を爲す。華は日影を開く、
液は水燥を開く　以て虚動實靜の中に充つ。　(PB 333)
八六七　我　已に地を履み天を載く。我を以て順逆を定む。
八六八　地の磅礴は土石を結んで拗突を爲す。以て散虚の天に居る。
八六九ー七〇　拗處は水占む、
突處は燥占む、
天文は上に懸る、
地章は下に捧ぐ、
八七一　發收の際、寒熱　明暗　溫涼　行わる、
八七二
八七三
八七四
八七五

水燥の間、原野　山嶽　河海　成る、
俯立の諸質は地上に依りて立つ、
重竝の諸曜は運巔を奉じて環る、
地は弦中に止って而して處を移さず、
日は弧中に在って而して暫も住まず、
轉趺は、其の止を實す、
運巔は、其の動を虚す、
一常一變、何ぞ東線の一たび轉輪に合し。
一たび守極に横たわらざるを知らんや。故に

(削除)　・・・この行の文、甚だ粗略な傍記のため削除・・・
地上一層、廼ち水の處なり、
水上一層、廼ち燥の處なり、

(削除)　・・・この行の文、甚だ粗略な傍記のため削除・・・
日表一層、廼ち景の處なり、
景表一層、廼ち影の處なり、
色界は日を巔とす、景影は處を爲す、而して
星辰は其の下に羅る、是に於て巔小地廣なるを覺ゆ、
體界は地を趺とす、水陸は處を爲す、而して

(PB 334)

(I 396b)

八九四　動植は其の上に立す、是に於て地狭天大なるを覺ゆ、
八九五*　天なる者は清、故に星辰は乾燥光明を含む、
八九六　地なる者は濁、故に動植は潤溼重暗を含む、
八九七*　故に萬物の遊ぶ所は天にして景影なり、
八九八*　至大は容れざる所莫し、
八九九*　至小は載せざる所莫し、
九〇〇*　容れざる所莫ければ、則ち物は其の内に沈む、
九〇一*　載せざる所莫ければ、則ち氣は其の外に浮く、
九〇二　沙を淘して金を取る、重き者は必ず沈む、
九〇三　物を漬けて粗を去る、輕き者は必ず浮く、故に
九〇四　氣象は轉中に浮く、
九〇五―〇六　氣質は持中に沈む、夫れ天なる者は無象にして虚なり、
地なる者は有質にして實なり、
九〇七　無象は浮べば、則ち有象も亦た從いて浮く、
九〇八　諸質は沈めば、則ち本質更に沈む、故に
九〇九　無象は更に有象より浮く、
九一〇*　本質は更に諸質より沈む、故に
九一一　天は象を有するに麁なり、
九一二*

九一三　象を失するに精なり、
九一四　地は質を有するに實なり、
九一五　質を失するに虚なり　蓋し夫れ
九一六　天なる者は精大なり　而して
九一七ー一八　日なる者は麁小なり　麁小は以て精大に居る、
九一九*　月表一層、景　之を環る、
九二〇*　景表一層、影　之を容る、
九二一　地は堅重、而して
九二二ー二三　水は輭輕、輭輕は以て堅重を抱く、
九二四　地上一層、水　之を環る、
九二五　水上一層、燥　之を環る、
九二六　燥影は天の一圓中に在る。而して天は坱坱の中に居る。
九二七　辰は景を以て其の處と爲す、其の物は会にして而して能く光を假る、
九二八*　星は影を以て其の處と爲す、其の物は昜にして而して能く光を發す、然り而して
九二九　日は黄道を行く。
九三〇*　星は黄極に管す。
九三一　地にして水燥なり、
九三二*　景影なる者は、天中萬物の散ずる所、其の物は乾燥光明、輕くして浮き鋪く、

水燥なる者は、地中萬物の聚まる所、其の物は潤溼黯濁、重くして下に就く、
動植の二。水陸同じく有り。
水には則ち鱗倮藻樹の二、
陸には則ち禽獸艸木の二、
運轉の圈。巔趺を反す。動植も亦た此に資る。
植は地を本とす、
動は天を本とす、故に
景影に居る者は、象質の分有りと雖も、而も總て天の象に歸す、
其の體を虛にし、其の物を色にし、聚散の跡を示さずして、以て其の物を常にす、
循環は已まず、以て東西す、
水燥に居る者は、天地の分有りと雖も、而も總て地の物に歸す、
其の體を實にし、其の物を液にし、常に解結の跡を露して、以て其の物を變にす、
鱗比は斷たず、以て升降す
是に於て天地は能く立す、
　天神は能く活す、
天にして日影、氣を得て東西す、
地にして水燥、氣を得て升降す、以て大物を全す。
其の一は已に分れ。

(PB 336)

(I 397a)

九三三
九三四
九三五*
九三六*
九三七
九三八
九三九
九四〇*
九四一
九四二
九四三
九四四
九四五
九四六
九四七
九四八
九四九
九五〇 [散]*朱筆

易は緼し会は絪し。
大は給し小は資り。而して大は能く小を剖く。
剖きて零碎に至りて、末は猶お本のごとし、
合して諸を一に歸す、本は猶お末のごとし、是に於て
物は各〻絪緼給資す。亦た散小の天地を含む。
日影の星辰に於る。
水燥の動植に於るより。
以て散じ以て變じ。窮極する所莫し。是に於て
蔦は生を木杪に寄せ。蛆は體を肉中に化すと雖も。
亦た末は猶お本のごとし。是を以て
精を没し麁を露す、
時を經し處に居る、
神本は物を成す、
生化は通を爲す、
大に資りて以て成る、
各に依りて以て立つ、
天に在る者は、乾燥清明なり、
地に在る者は、潤溼黯濁なり、

九五一
九五二
九五三
九五四
九五五
九五六
九五七
九五八
九五九
九六〇
九六一
九六二
九六三
九六四
九六五
九六六
九六七
九六八

九六九　天地の有する所、我　廼ち之を具す、
九七〇　我の　具する所、天地廼ち之に應ず、
九七一　小に成る者は大に資る、
九七二　地に成る者は天に應ず、
九七三ー七四　天は運轉環守の方を定めて、而して地も亦た中線兩極の位定まる、
九七五ー七五　天は噓噏升降の地を更にし、而して地も亦た發收肅舒の氣變ず、
九七七　地體は一圓塊、其の用は一一を更にす、
九七八　天は則ち　日は照らし影は蔽い、　日は煦め影は肅す、
九七九　地は則ち　照を晝にし蔽を夜にし、　春は煦め秋は肅す、
九八〇　天氣は清浄なり、
九八一　物體は濁穢なり、
九八二　萬物は成壞し。火發し水收むるの中に遊ぶ。故に
九八三　氣　肅すれば則ち天清く水涸る、霜雪は凝閉し、　植は枯れ動は蟄す、
九八四　氣　煦すれば則ち天濁り溼動く、雨露は蒸騰し、　植は榮え動は出づ、
九八五　物の煦肅に應ずるなり。
九八六　日照せば、則ち天は明に彩は見る、
九八七　植にして花　咲く、
九八八　動にして神　旺す、

影蔽えば、則ち天は暗に彩は没す、
植にして華合す、
動にして神藏す、
物の照蔽に應ずるなり、
天動は東西す、
地動は升降す、
天動は循環す、
地動は鱗比す、是に於て
天象は則ち、日月東西に運轉す、
地象は則ち、水火上下に升降す、
地昜は蒸騰して会液を噴けば、則ち雲を發して升り、雨を結んで降る、
天会は肅凝して地昜を収れば、則ち電を閃きて出で、雷を發して擊つ、
天は、動きて變ずるの體なり、而して
其の行は則ち整齊す、攸遠にして天は轉じ象は運す、
日は交し月は食す、
晝夜は度を定む、
冬夏は氣を序す、
地は、靜にして定まるの體なり、而して

(I 397b)

九八九
九九〇
九九一
九九二
九九三
九九四
九九五
九九六*
九九七*
九九八
九九九
一〇〇〇
一〇〇一
一〇〇二
一〇〇三
一〇〇四
一〇〇五
一〇〇六

其の行は則ち錯綜す、倏忽として風は起り雨は至る、
霖旱は常ならず、
会晴は常無し、

是れ則ち天は定り
神は變じ、
歳は天に成り、
運は神に爲す、是れ卽ち反比の間なり。

地は一水土塊なり。天の守軸に資りて、南北を爲す、
天の中線に資りて、東西を爲す、

天は景影の處を開く、
地は水燥の場を開く、自から剖して相い偶するに至りては、則ち
水の高き者は雨を爲す、
卑き者は水を爲す、
土の突する者は陸を爲す、
陷する者は壑を爲す、
燥は山を領す、
水は壑を領す、
山は水中に居りて島嶼を爲す、

一〇二五　水は陸中に居りて江湖を爲す、
一〇二六　人の取りて以て居る者は山なり。水に對して陸と呼ぶ。
一〇二七　土の山を爲す者は大壤二つにして。而して其の散は數を知らざるなり。
一〇二八　神は活し物は立す。生を以て經を爲す、
一〇二九　　身を以て緯を爲す、
一〇三〇　　肅して冬を爲す
一〇三一　　舒して夏を爲す、
一〇三二　神旺は我が晝を爲す、
一〇三三　氣睡は我が夜を爲す、
一〇三四　我れ亦た任督中界を分つ。而して
一〇三五　左右前後は。東西南北に應ずる有り。
一〇三六　如し數えて之を盡くさんと欲せば。則ち
一*〇三七　大物を數え盡くして便ち乃ち始めて盡くさん。
一*〇三八　麁を以て露すと雖も。而も唯だ一　混として萬有を含む。
一〇三九　天地の物を露するや。地は塊焉として中に立す。
一〇四〇　　天は藐焉として外に居る。
一〇四一　混淪たる一球。實に天神の體にして。而して一は此を以て成る。
一〇四二－四三　一の成る所。卽ち二の合する所なり。

一〇四四　物は虚實を以て而して没露す、
一〇四五　氣は清濁を以て而して隠見す、
一〇四六　分れて勢を張るなり。夫れ
一〇四七ー四八　處は、坱然として物を容る者なり、中は不偏に於て定る、
一〇四九　物は、塊焉として處に居る者なり、外は無垠に於て成る、
一〇五〇ー五一　無内の中に乗る、無外の外に充つ、故に
一〇五二　物は虚を以て天體と爲す、
一〇五三　實を以て地體と爲す、
一〇五四　氣は轉を以て天機と爲す、
一〇五五　持を以て地機と爲す、
一〇五六　理は以て氣を布く、
一〇五七　形は以て體を成す、
一〇五八　内は諸を中に託す、
一〇五九　外は諸を處に寄す、
一〇六〇　火は天に華す、
一〇六一　水は地に液す、
一〇六二　坱坱に宅す、
一〇六三

(I 398a)

一〇六四　衮衮に路す、
一〇六五　天地は、物體を露す、
一〇六六　水火は、性體を見す、
一〇六七　天地は、至大の物、形位は没し、機體は露す、
一〇六八　水火は、至著の物、性氣は隠れ、象質は見る、故に
一〇六九　形體は物を天地に於て露す、
一〇七〇　象質は性を会易に於て見す、
一〇七一　形體は能く物に合す、
一〇七二　象質は能く物を分つ、是を以て
一〇七三　實體は結を得て而して堅なり、
一〇七四　虚氣は動を得て而して剛なり、
一〇七五　剛は麁を容れず、
一〇七六　堅は清を停めず、
一〇七七ー七八　轉持は處を分つ、而して天地は位を定む、
一〇七九ー八〇　清濁は氣を布き、而して象質は處を得る、是を以て
一〇八一　散するや、處と其の氣を合す、
一〇八二　結ばるや、物と其の性を成す、
一〇八三　氣物性體は。相い得て全す。是を以て

質實は結を收む、堅重は地を爲す、
虛象は聚發す、柔輕は象を爲す、是に於て、正偶は相い反す、
斜偶は相い比す、

一反一比。文章を織るが如し。

我れの居る所は。則ち水燥の偶する所なり。

煦噓滋液。以て絪縕を認む。

象の天に懸る者は。則ち日月なり。

日は本と明體、影と明暗を地上に於て更にす、

月は本と暗體、日と明暗を天中に於て更にす、

日は燥と性を同じくす、故に燥は日の南北に從いて肅舒す、

月は水と性を同じくす、故に水は月の晦望に從いて消長す、

日月は上に旋轉す、

水陸は下に羅列す、是に於て

日月は周回して、而して朔望冬夏は歲を爲す、

水燥は交錯して、而して雲雷雨雪は運を爲す、

神は其の中に鬱浡として。絪縕摩盪し。

各其の本根精英を具し、萬の動植を成す。

人は動中の一物。之を大に資り。以て己の天地を成す。

(PB 340)

一〇八四―八五

一〇八六―八八

一〇八九

一〇九〇

一〇九一

一〇九二

一〇九三

一〇九四

一〇九五

*一〇九六

一〇九七

一〇九八

一〇九九

一一〇〇

一一〇一

一一〇二

*一一〇三

一一〇四

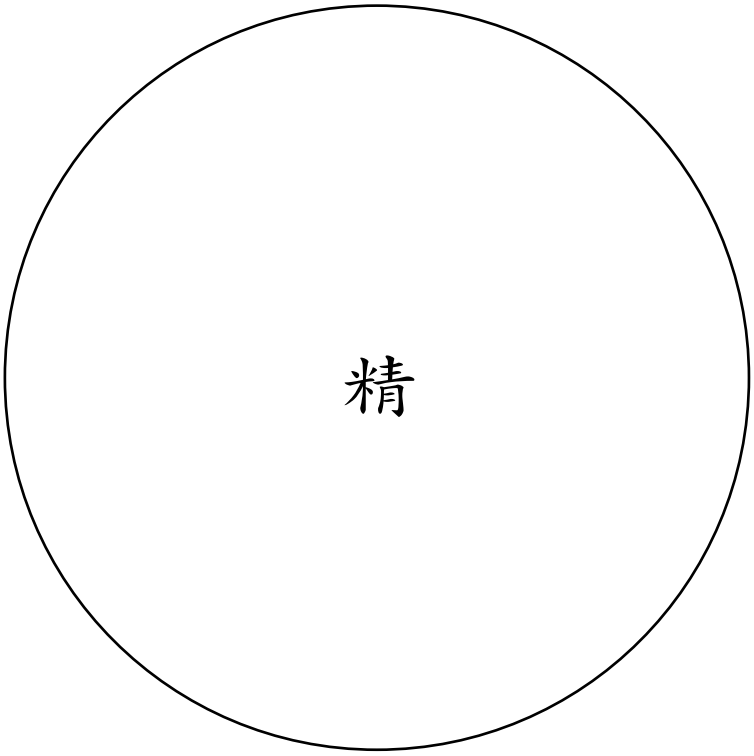
一一〇五　已に其の天地を成して。而して其の境を開けば。則ち
一一〇六　佗の天地萬物を并せて。我と對す。故に
一一〇七　物を分ちて人物と曰う、
一一〇八　氣を分ちて天人と曰う、
一一〇九　人より天地に溯れば。則ち一は大物を開きて。境に露没有り。
一一一〇　我は小中に立ちて。境に人物有り。

(PB 341, I 398b)

【五〇一―〇二と五〇三の間の抹消部分の復元。割り注を●で消している。】

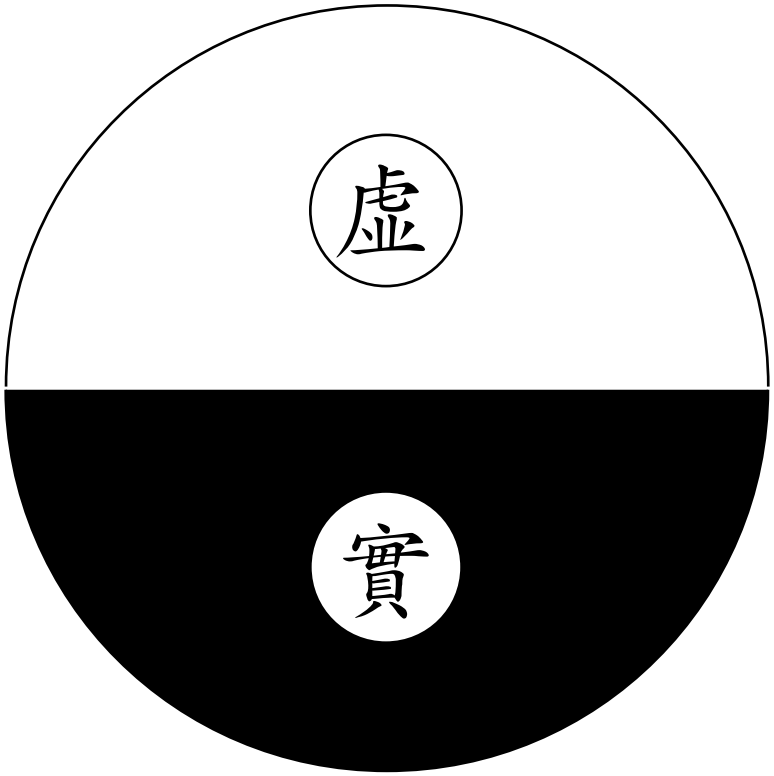
既曰氣物性體。又曰氣者性也。何謂。蓋氣物既立則性體以配氣物。
性體合氣物分則氣物各具性體。故神者氣也。又曰物。物者質也。
又曰氣。列本根精英。觀其由性發英。物□偶氣。則性乃氣□。故
宇宙而没其體轉持□成其形。又地露其物陰陽見其氣、故本根自氣
物。體隱然運中。性挺然發其外。故曰本□。以氣物而□□而□。
隱然見其精英。妙合玅分。混然唯見其一之立焉。　（□は黙視による判読困難）

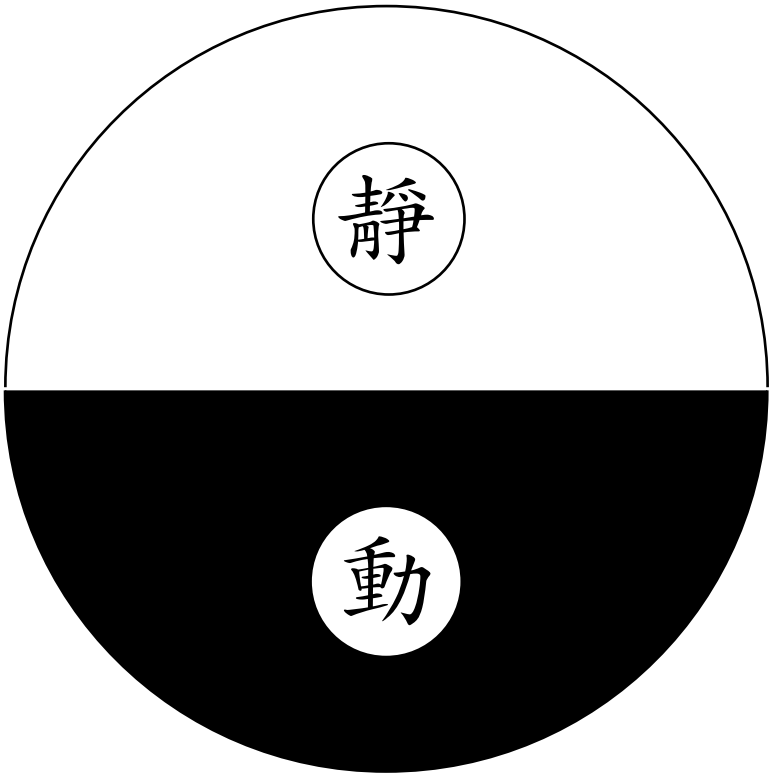
天容地居圖一合



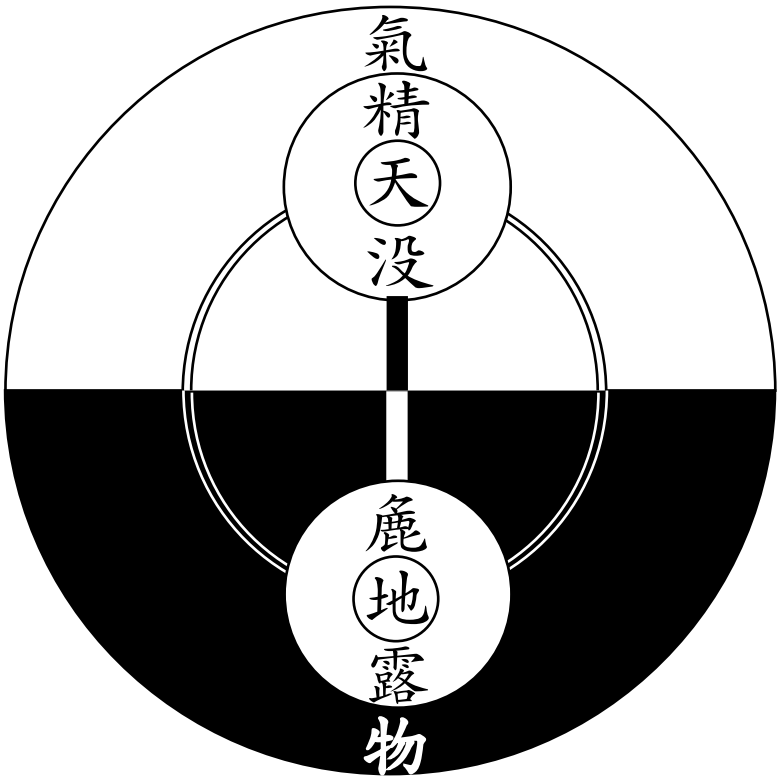
地

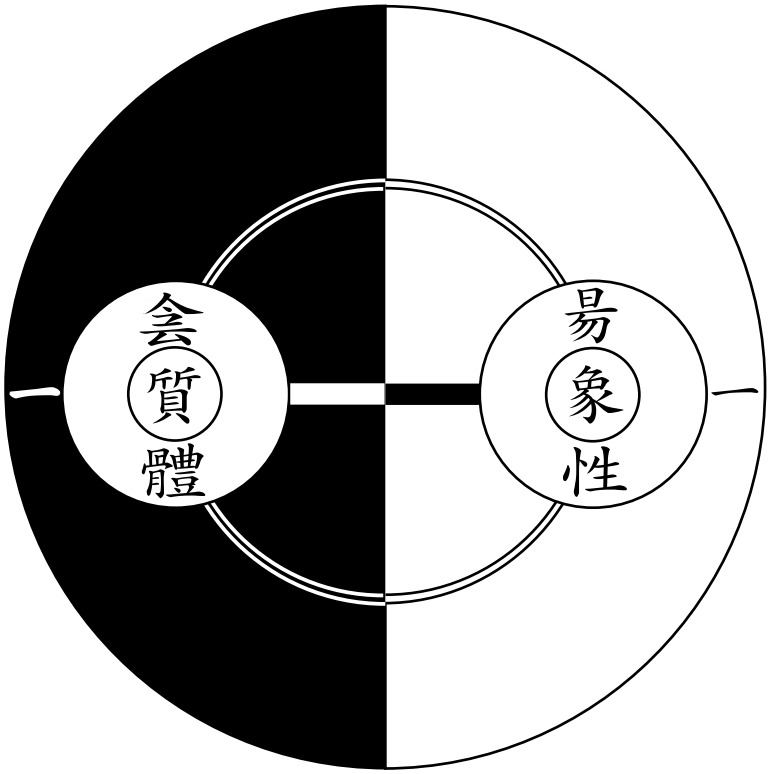
各麃居各精圖一合



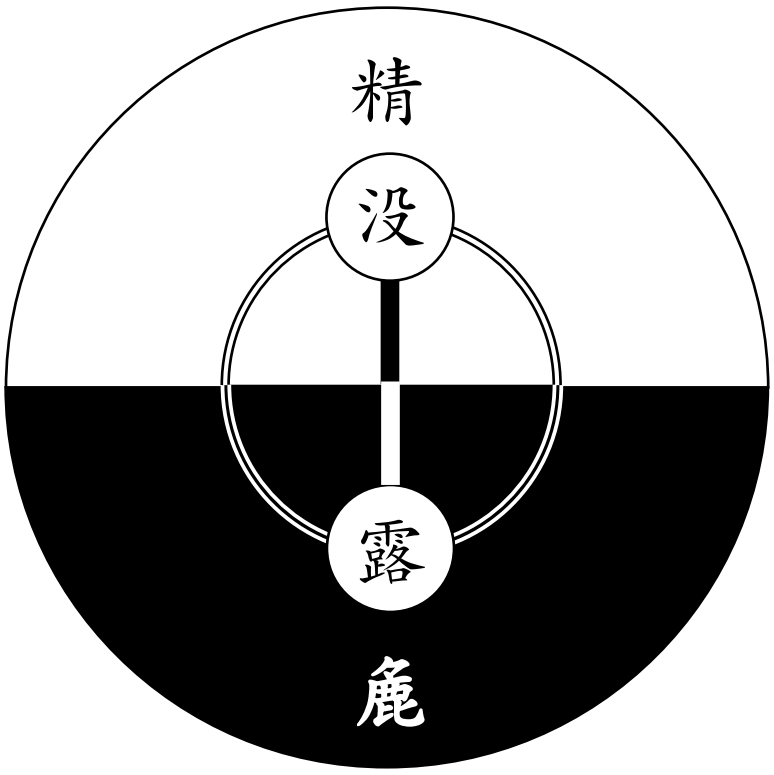

靜
動

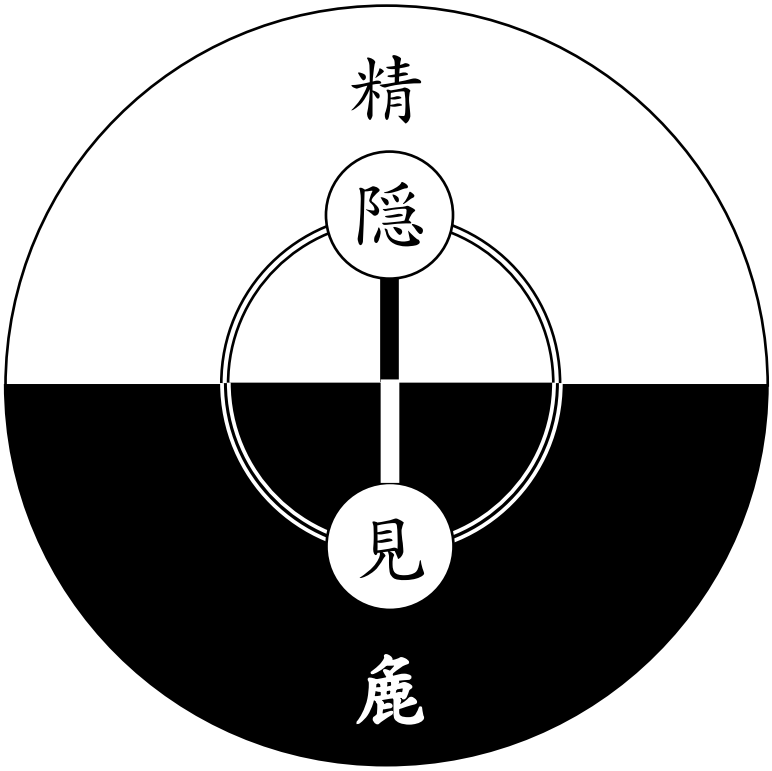
天象地質圖一合




會
質
體
易
象
性

没露隱見圖一合

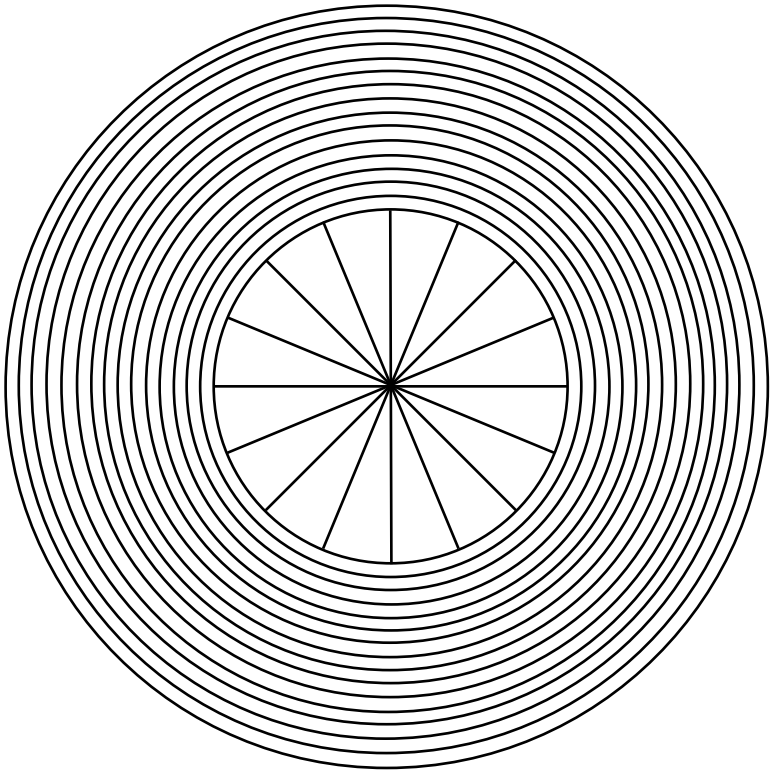



精
隠
見
鹿

宇宙

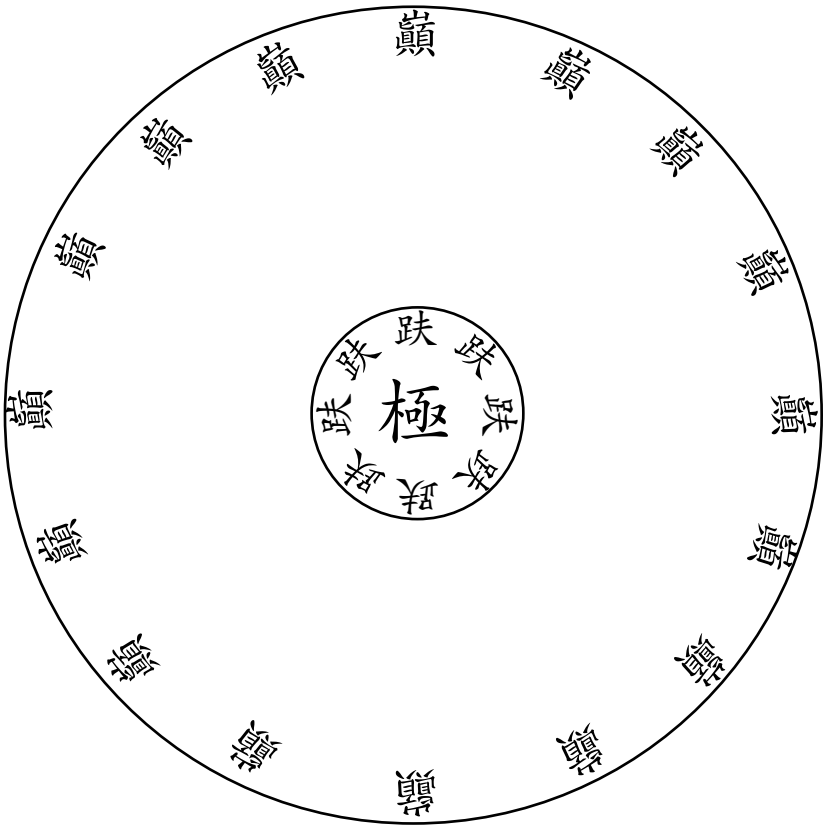
體精未
上圖焉

轉持圖



運轉合圈圖

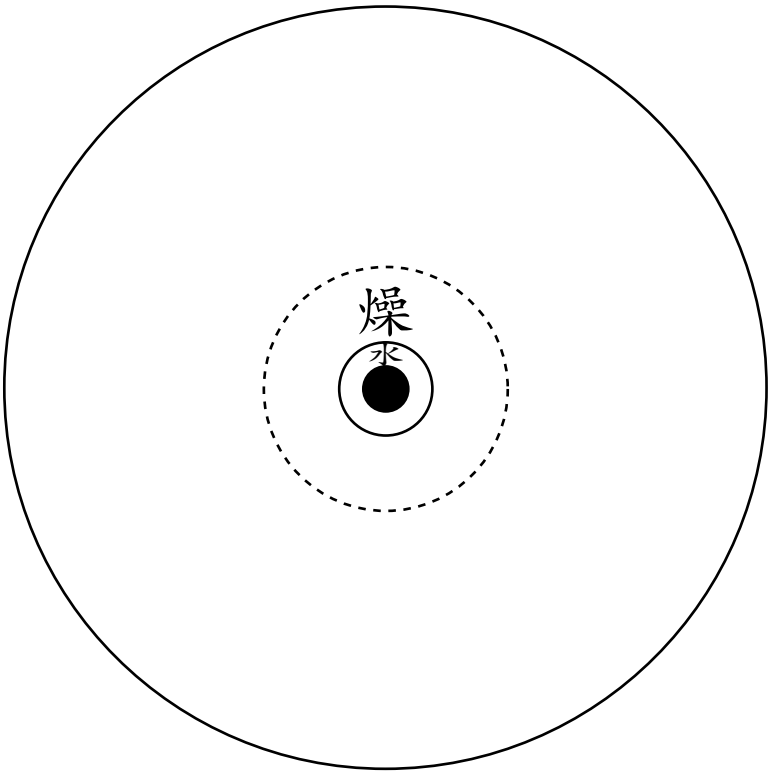
上ヲ爲二轉一圈一
下ヲ爲二運一圈一



趺 趺 趺 趺 趺 趺 趺 趺 趺 趺 趺 趺 趺 趺 趺 趺
巔 巔 巔 巔 巔 巔 巔 巔
極

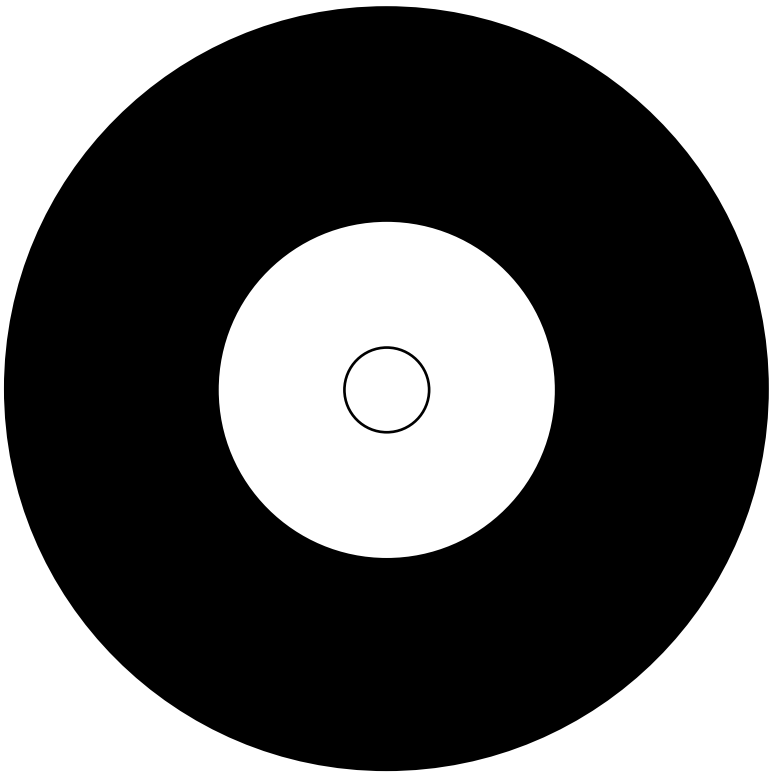
天地圖

水燥ス
合レ圈ヲ

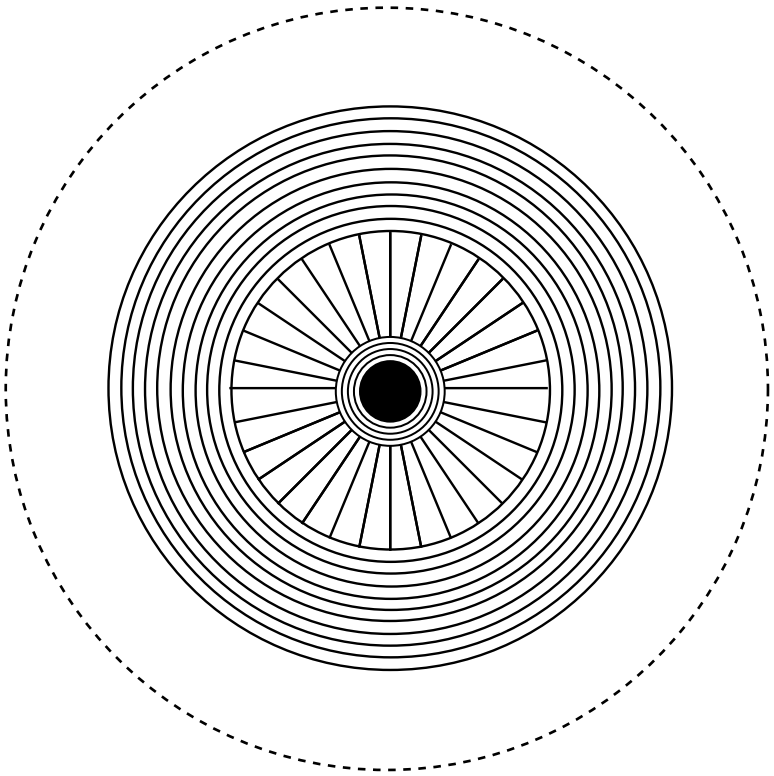


日影圖

天地分圈ヲ

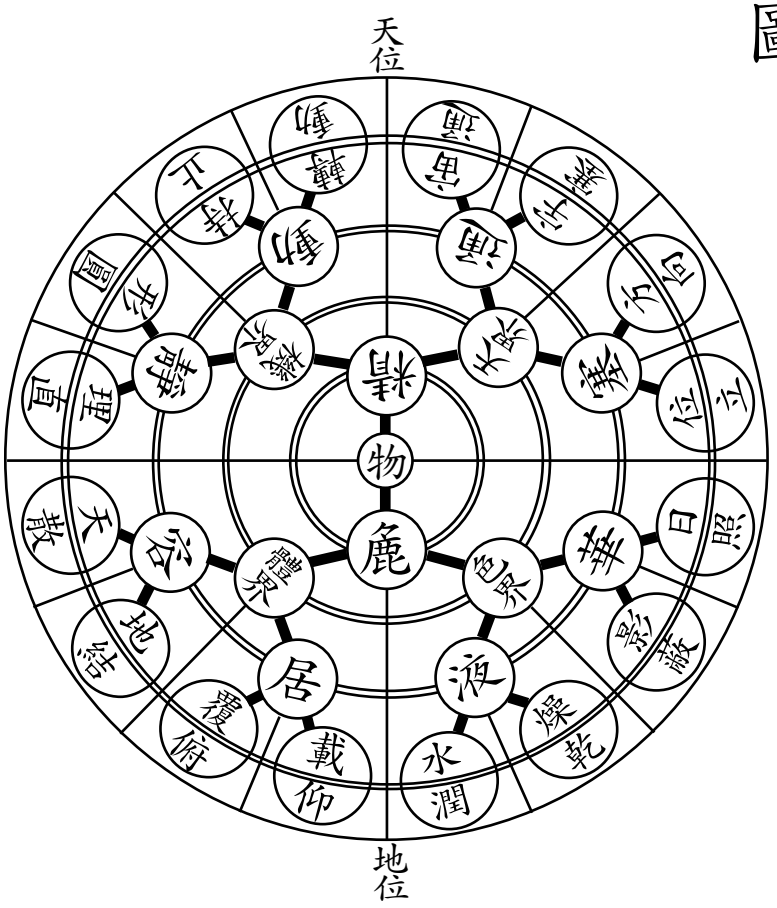


覆載圖



天地散レ二結シ一于二虛實中外之中一ニ
覆載俯レ二仰ス一于二天地上下之中一ニ

四界圖


天位
地位
緜
物
麁
動
轉
住
止
遍
周
滿
空
無
分
分
位
位
日
照
光
蔽
燥
乾
水
潤
載
佈
覆
荷
地
結
天
散
空
濁
界
色
界
欲
界
無
色
界
緜
緜
緜